

新編 古今圖書集成

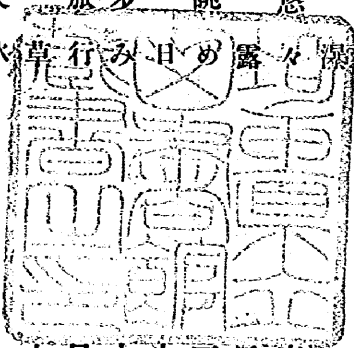
第九號

L050
才

3 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

目次

淨琉璃の起源	文學士	高木天香
成功熱を排す	石島薇山	
時言數則	狩野形外	
文藝漫評	山田怨月	
青眼白眼	石島薇山	
華嚴	さむせむ	
微吟悠	齋藤紫石	
湖の眺	浮城會	
春の歩	石島薇山	
宵の歩	山田怨月	
近郊の旅	中野不秋	
忍ふ草	目崎得養	
盆山尺水	小林すみれ	
○晚秋	蓉芙生	
○進取の氣象勿るべからず	佐藤鷗州	
○成功	佐藤鷗州	
○某温泉に遊ぶ	稻垣方雄	
○忍耐	原田俊郎	
○大和魂	羽山助右衛門	



○善く働き善く遊ぶべきの論	I S 生
○幼時を憶ふ	小宮義敬
○成功と辛苦	古市勉
○起てよ青年	伊藤彦次
○THE MOON IN SUMMER.	田村榮造
臺灣土産生蕃の近狀	野村二郎
幼時	貫水
愛泉子に答ふ	絳生
解嘲	石島薇山
編輯餘言	愛泉生
本會記事	石島薇山
○圖書部報告	數十項
○運動部報告	
○編輯便り	
※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※	
◎正誤五十頁の末行の英文……manner, the minimized moon-blav は……manner. The minimized moon-beam の誤	
五十二頁初行 lovely は lovely の誤	

「忍學友會之歌」を募る

「忍學友會之歌」はわが會の主張と綱領とを明にし、以て隱約の間に志氣を鼓舞せしむるものなり。要するに詩的價值を問ふものに非ざりて實用的軍歌的たるを欲す。蓋し日々會員の諷誦に資せんとするものなれど也。本會が會歌募集の趣旨主として茲に在り。故を以て是が規程を定むる事左の如し。

- 一、「忍學友會之歌」は向上と歌ひ、活動を歌ふべし。別に消極的主義として親睦を歌ふを要す。一言にして掩へたる向上的、活動的にして協和を旨とするものなれば本會の精神也。
- 二、歌の体裁はマリーナ体なるべし。四句を一章とし五章二十句内外にて終るを要す。句法は作者の選ぶ處に任す。七五調も可、五七調も亦可、長句短句相錯雜するも亦妙なり。應募者は「處世の歌」「第一高等學校々々歌」「海軍機關學校之歌」等を参照するを可とす。蓋し本會の募る處の歌全然是等の体裁を則るものなれど也
- 三、構想、措辭共に作家の好む處に従ふ。ただ用語は拮据の弊あるとも豪健にして剛壯なるべし。流暢は可なるも柔弱なるを厭ふ。
- 四、本會創立以來既に七週年、熊谷中學に縁故ある者にして忍町出身者をして以て成る。會員僅に六十餘名。而も機關雜誌の刊行あり、運動部の設立あり、圖書部の設置あり、行動部に學生的特色を逸せざらんとす。華を棄て、實を執り餘るに他日の立脚地を築くものなり。
- 五、應募は何人にも可なり。但し會員以外の應募者に對しては本會は望む處に従つて材料の給與、その他諸種の便宜を與ふることを誓ふ。望む者は返信料封入直接に本會編輯部へ宛て照會せらるべし。

670/

目次

淨瑠璃の起源	文學士	高木天香
成功熱を排す	石島薇山	
時言數則	狩野形外	
文藝漫評	山田怨月	
青眼白眼	石島薇山	
華嚴瀑	さむせむ	
微吟悠々	齋藤紫石	
冷の眺め	浮城會	
湖の眺め	石島薇山	
春の一日	山田怨月	
宵の歩み	中野不秋	
近郊旅行	目崎得養	
忍ぶ草	小林すみれ	
盆山尺水	蓉英生	
●晚秋	佐藤鷺州	
●進取の氣象勿るべからず	佐藤鷺州	
●成功	稻垣方雄	
●某温泉に遊ぶ	原田俊郎	
●忍耐	羽山助右衛門	
●大和魂		

◎善く働き善く遊ぶべきの論

◎幼時を憶ふ

◎成功と辛苦

◎起てよ青年

◎THE MOON IN SUMMER.

臺灣土産生蕃の近狀

幼時

愛泉子に答ふ

解嘲

編輯餘言

本會記事

◎圖書部報告

◎運動部報告

◎編輯便り

I S 生

小宮義敬

古市勉

伊藤彦次

田村榮造

野村二郎

貫水

絳生

愛泉生

石島薇山

數十項

670 /

『忍學友會之歌』を募る

『忍學友會之歌』はわが會の主張と綱領とを明にし、以て隱約の間に志氣を鼓舞せしむるものなり。要するに詩的價值を問ふものに非ざりて實用的軍歌的たるを欲す。蓋し日々會員の諷誦に資せんとするものなれど也。本會が會歌募集の趣旨主として茲に在り。故を以て是が規程を定むる事左の如し。

一、『忍學友會之歌』は向上と歌ひ、活動を歌ふべし。別に消極的主義として親睦を歌ふを要す。一言にして掩へて向上的、活動的にして協和を旨とするものなれ本會の精神也。

二、歌の体裁はマーチ体なるべし。四句を一章とし五章二十句内外にて終るを要す。句法は作者の選ぶ處に任す。七五調も可、五七調も亦可、長句短句相錯雜するも亦妙なり。應募者は『處世の歌』『第一高等學校々歌』『海軍機關學校之歌』等を参照するを可とす。蓋し本會の募る處の歌全然是等の体例を則るものなれど也

三、構想、措辭共に作家の好む處に従ふ。ただ用語は拮据の弊あるとも豪健にして剛壯なるべし。流暢は可なるも柔弱なるを厭ふ。

四、本會創立以來既に七週年、熊谷中學に縁故ある者にして忍町出身者をして成る。會員僅よ六十餘名。而も機關雜誌の刊行あり、運動部の設立あり圖書部の設置あり、行動二に學生的特色を逸せざらんとす。華を棄て、實を執り徐ろに他日の立脚地を築くものなり。

五、應募は何人にも可なり。但し會員以外の應募者に對しては本會は望む處に従つて材料の給與、その他諸種の便宜を與ふることを誓ふ。望む者は返信封入直接に本會編輯部へ宛て照會せらるべし。

六、應募の作は責任を負ふて本誌編輯員之を選評し、斯道大家の批判を待て採否を決すべし。
 七、一等當選の作は曲譜を附し會員をして諷誦せしむ。
 八、投稿の切期日は來年三月三十一日限とす。
 九、一等當選者へは金參圓を贈呈す。
 江湖幾千の秀才諸君！冀ふはそが續腸を傾倒して吾人が企畫をして圓滿なる効果を現せしめよ。薄謝固より大方の勞に酬ゆるよ足らずと雖も亦區々の微衷のみ。審査の結果は之を地方各雜誌に廣告し、作物は之を忍學友會雜誌第十號に掲載すべし。發表の日は七月とす。幸ひに吾人の爲めに一臂の勞を吝む勿らんことを祈る。
 (注意) 不明の点は照會を待て答ふべし。照會は凡て編輯部宛之事

武州忍町行田

忍學友會

申込所 武州忍町行田石島都太郎方 忍學友會編輯部

忍學友會規則

- 第一條 本會ハ忍學友會ト稱ス
 第二條 本會ノ目的ハ會員相互ノ交誼ヲ温メ兼テ智徳体三育ノ發達ヲ圖ルニアリ
 第三條 本會ハ忍町ノ者ニシテ忍高等小學校出身埼玉縣立熊谷中學校生徒ヲ以テ組織ス
 但シ一旦本會ニ加入セシモノハ熊谷中學ヲ卒業シ若シクハ中途退學スルモ特別ノ場合ヲ除クノ外ハ猶會員タルノ資格ヲ有スルモノトス
 第四條 本會ハ本部ヲ忍町ニ置ク
 但シ必要ニ應ジ各地方ニ支部ヲ設置スルコトヲ得
 第五條 名望學識アル士ニシテ特ニ本會ノ趣旨ヲ贊助セラル、モノハ役員會ノ決議ヲ經テ賛成員ニ推薦スルコトアルベシ
 第六條 本會ノ爲メ特別盡力セラル、モノハ役員會ノ決議ヲ經テ特別會員ニ列スルコトアルベシ
 第七條 本會ノ目的ヲ達セン爲メ編輯部圖書部及運動部ヲ置ク
 一月八月ノ二回ニ大會ヲ又隨時ニ小會ヲ開ク
 第八條 編輯部ハ毎年一回ノ機關雜誌編纂ヲ以テ要旨トシ圖書部ハ有益ノ書籍ヲ蒐集シテ會員ノ研學ニ資シ運動部ハ運動諸般ノ器具ヲ備ヘ体育ヲ奨勵ス
 第九條 本會ノ事務ヲ處理スル爲メ左ノ役員ヲ置ク
 一 幹事長 一名
 一 幹事 二名 (内會計幹事一名)
 一 編輯部委員長 一名 全部委員若干名
 一 圖書部委員長 一名 全部委員若干名
 一 運動部委員長 一名 全部委員若干名
 第十條 幹事長ハ本會ノ事務ヲ總理ス
 第十一條 幹事ハ本會ノ事務會計ヲ分掌ス
 第十二條 各部委員長ハ委員ト共ニ其事務ヲ主リ兼テ委員ヲ監督ス
 第十三條 各部委員ハ委員長ヲ補佐シテ各部ノ庶務ヲ處理ス
 第十四條 幹事長ノ任期ハ滿一ケ年トシ會員中ヨリ之ヲ推選ス 但再選スルヲ妨ケズ
 幹事ハ會員ノ互選ヲ以テシ其任期ヲ四ケ月トス 但重任スルヲ得ズ
 各部委員長ハ幹事長之ヲ定メテ囑托シ委員ハ委員長ノ指名ヲ以テ幹事長之ヲ囑托スルモノトス

(委員ノ任期ハ各部之ヲ定ム)

第十五條 役員會ハ幹事長幹事及各部委員長ヲ以テ組織シ必要ノ際幹事長之ヲ招集ス

第十六條 會員タルモノハ毎月會費金拾錢ヲ納付スルモノトス 但熊谷中學卒業生及中途退學者ハ之ヲ免除ス

第十七條 大小會開會ノ時ニハ別ニ會費ヲ徴收ス

第十八條 會員ニシテ本會ノ体面ヲ瀆シ又ハ本會ノ規定ニ從ハズシテ秩序ヲ亂スモノハ役員會ノ決議ヲ以テ除名スルコトアルベシ

第十九條 本則第三條ニ該當スルモノニシテ入會セントスルモノハ申込書ヲ差出スベシ

第二十條 本則ハ大會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ賛成アルニアラザレバ訂正増補スルヲ得ズ

忍學友會支部設置規則

- 一 會員五名以上居住ノ地ニハ本會役員會ノ承認ヲ經テ支部ヲ設クルコトヲ得
- 二 支部所在地ニ住スル各種會員ハ必ス其地ノ支部員タルベキモノトス
- 三 支部ヲ設置セントスル時ハ支部規則并ニ其地ノ現在會員ノ名簿ヲ添へ本會へ申込ムベシ

但シ會員名簿ニハ會員ノ住所及職業ヲ詳記スルヲ要ス

三 支部ニハ一定ノ事務所ヲ設ケ幹事ヲ置キ通信及會計ノ事務ヲ擔當セシムベシ

四 各地支部規則ノ改正變更等ハ必ズ本部へ報告スベシ

五 支部解散シタル時ハ解散當時ノ支部幹事ハ其解散ノ理由ヲ詳記シ速ニ本部ニ報告スベシ



忍學友會雜誌第九號

淨瑠璃の起原

文學士 高木天香

應仁の乱後は、笠藪の下なほ荒廢を免ぬかれざりしかバ麗に芳しかりし文學乃花もいつしか萎みて、學問はいたく衰へぬ。され文學史上暗黒時代と稱へらるゝ時代なり。かゝる間にも、織田豊臣乃二氏相續ぎ、東征西伐天下の乱を平けて學問を斃れあるに興さむと企てたれど、文學乃曙光は未だ容易に認むるゝ能はざりき。時なるかな、關ヶ原の一戦に、徳川家康は四海均一は業をたて、世は二たび平和の雨露に浴せべき時に遇ひぬ。かえて、學問の曙光また輝きわたらむ時は來りぬ。

天下の乱離を匡救し、併せて、武士の心を他に向はしむべく、徳川氏は、劔戟の聲未だ熄まざる時、己に學校を設け遺書を塵埃の間に求め、活字を製して書籍を板行し、盛に學問を奨めたりき。元和偃武の後、天下やう／＼靜謐に歸して、富と人口とは驚くべく進み山田の稻の雨を得て勃然として起つが如く、文學史上

春花秋月の如き文華は日に起りぬ。

抑も、江戸時代の文學は、あらゆる種類を網羅して殆ど遺すところなし。され、江戸文學の特長也。されど此の期の文學が次第に下向的傾向をあらはして豊富なる平民文學を有せしよとは、江戸文學の著しき特長にあらざや。

戰國の世、劔をたれ事とし、文學の如き絶えてこれを講せざりし民衆は、容易に求めらるべき古書も、これを讀過すべき豫習と耐忍とを有せざりしや明なり。されバ、先覺者は卑近なる言語にて、通俗に古書の精髓を指示するを要したるならむ。され文學が漸之下向的傾向をあらはせし第一歩也。元和偃武の後、物質的の富ます／＼増殖せる民衆は、やう／＼治に馴れ奢侈に飽きて、彼等の嗜好に適し且容易に理解し得べき文學を欲望するよといと／＼深うなりぬ。かくて、一般の嗜好に適すべき平民文學は、早晚あらはさざるべからざる也。

江戸文學れ先驅として先づ發生せしは、雜話と軍物語若しいひ得べく久は歴史文學となりき。蓋し、時なほ戰亂の世を距るよと近く、一夕れ夜談、父祖がいくさ物語に耳を肥し、ものもあるべく、稍文字あるものは過

(委員ノ任期ハ各部之ヲ定ム)

第十五條 役員會ハ幹事長幹事及各部委員長ヲ以テ組織シ必要ノ際幹事長之ヲ招集ス

第十六條 會員タルモノハ毎月會費金拾錢ヲ納付スルモノトス 但熊谷中學卒業生及中途退學者ハ之ヲ免除ス

第十七條 大小會開會ノ時ニハ別ニ會費ヲ徴收ス

第十八條 會員ニシテ本會ノ休面ヲ演シ又ハ本會ノ規定ニ從ハズシテ秩序ヲ亂スモノハ役員會ノ決議ヲ以テ除名スルコトアルベシ

第十九條 本則第三條ニ該當スルモノニシテ入會セントスルモノハ申込書ヲ差出スベシ

第二十條 本則ハ大會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ賛成アルニアラザレバ訂正増補スルヲ得ズ

忍學友會支部設置規則

一 會員五名以上居住ノ地ニハ本會役員會ノ承認ヲ經テ支部ヲ設クルコトヲ得

二 支部所在地ニ住スル各種會員ハ必ス其地ノ支部員タルベキモノトス

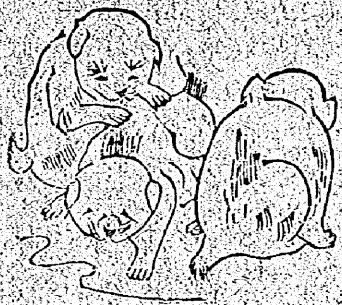
三 支部ヲ設置セントスル時ハ支部規則并ニ其地ノ現在會員ノ名簿ヲ添ヘ本會ヘ申込ムベシ

但シ會員名簿ニハ會員ノ住所及職業ヲ詳記スルヲ要ス

三 支部ニハ一定ノ事務所ヲ設ケ幹事ヲ置キ通信及會計ノ事務ヲ擔當セシムベシ

四 各地支部規則ノ改正變更等ハ必ズ本部ヘ報告スベシ

五 支部解散シタル時ハ解散當時ノ支部幹事ハ其解散ノ理由ヲ詳記シ速ニ本部ニ報告スベシ



忍學友會雜誌第九號

淨瑠璃の起原

文學士 高木天香

應仁の乱後は、葦穀の下なほ荒廢を免ぬかれざりしかバ麗に芳しかりし文學乃花もいつしか萎みて、學問はいたく衰へぬ。され文學史上暗黒時代と稱へらるゝ時代なり。かゝる間にも、織田豊臣乃二氏相續ぎ、東征西伐天下の乱を平けて學問を甦れもるに興さむと企てたれど、文學乃曙光は未だ容易に認むるゝ能はざりき。時なるかな、關ヶ原の一戰に、徳川家康は四海均一に業をたて、世は二たび平和の雨露に浴せべき時に遇ひぬ。かゝて、學問の曙光また輝きわたらむ時は來りぬ。

天下の乱離を匡救し、併せて、武士の心を他に向はしむべく、徳川氏は、劔戟の聲未だ熄まざる時、己に學校を設け遺書を塵埃の間に求め、活字を製して書籍を板行し、盛に學問を奨めたりき。元和偃武の後、天下やうく靜謐に歸して、富と人口とは驚くべく進み山田の稻の雨を得て勃然として起つが如く、文學史上

春花秋月の如き文華は日に起りぬ。

抑も、江戸時代の文學は、あらゆる種類を網羅して殆ど遺すところなし。され、江戸文學の特長也。されど此の期の文學が次第に下向的傾向をあらはして豊富なる平民文學を有せしよとは、江戸文學の著しき特長にあらざらば。

戰國の世、劔をみれ事とし、文學の如き絶えておれを講せざりし民衆は、容易に求めらるべき古書も、おれを讀過すべき豫習と耐忍とを有せざりしや明なり。されば、先覺者は卑近なる言語にて、通俗に古書の精髓を指示するを要したるならむ。され文學が漸々下向的傾向をあらはせし第一歩也。元和偃武の後、物質的の富ますゝ増殖せる民衆は、やうく治に馴れ奢侈に飽きて、彼等の嗜好に適し且容易に理解し得べき文學を欲望するおといとく深うなりぬ。かくて、一般の嗜好に適すべき平民文學は、早晚あらはざるべからざる也。

江戸文學は先驅として先づ發生せしは、雑話と軍物語若しいひ得べくは歴史文學となりき。蓋し、時なほ戰亂の世を距るおと近く、一夕に夜談、父祖がゆきさ物語に耳を肥し、おのもあるべく、稍文字ゆるものは過

ぎよし方を想ひ出で、筆を下し給るがむるべし。一般の士人もまた往日の勇を洩すの餘地なく、徒に過去の武功を追想して感慨禁ざるが能はざりしなるべし。されば、軍物語は極めて彼等の嗜好に適したりしならむ。ごまと共に、隨筆因果物語が伽婢子の如き假草紙いでぬ。されど、され等は後の文學の暗示のみ。未だ民衆の要求を充すに足るべき平民文學をいふべからざる也。

平民文學の欲望は高まりぬ。大なる平民文學はあらはれざるべからざる也。『戯財録』の作者おれに答へては、

適、諸曲内外數百番あまど雖も、文章に片寄りて卑賤の輩等情移らざ。あな物語は大跡公卿宮人の作文多く、大和詞にて習はなくは解し難し。古き詞を思ひ出で、作るのみ。戯場の作文は他に劣りて聞ゆれども、淨瑠璃五段、歌舞伎六段物の狂言か中に、貴賤老若男女によらず、一文不通の鈍物に至るまで早く其意に通達して勸善懲惡を元として、喜怒哀樂目前に情をうつして心意をつらぬき、感解たるまどは嘘をしりながら腹をかへて涙をながす云々、と。淨瑠璃五段、歌舞伎六段とは、實に民衆の大なる

要求を充すべき平民文學なりき。

是より先き、足利氏の世に能樂をいふものありき。短き小駒を以て首尾全うする高尙にして且優美なる一種の劇なり。當時専ら士大夫の間に行れたれど、平凡なる民衆の鑑賞を値すべく餘りに高きに過ぎたりき、されば、能樂は僅に貴族間の嗜好に残りて、傀儡を採りて民衆の眼を慰むべき一種の劇起り、さらに能樂を入れて、二たび變じて歌舞伎となり、大なる發達を遂げたりき。操り劇、歌舞伎がやうく發達し一般の社會の好尙に適すると共に、操り劇に伴ひては一種の戯曲たる淨瑠璃起り、歌舞伎に伴ひては臺帳と呼ばれたる一種の脚本發達し、漸く民衆の注意を牽きたり。中に就きて、淨瑠璃は、元祿享保のころ、我邦における唯一の人生詩人近松門左衛門出づるに及びて、著しく發達して江戸文學の前半期を代表すべき大なる平民文學を形造らるゝに至りぬ。

そも、淨瑠璃の起原につきては、正しき書に見るところなし。たゞ、野史におれか記して同じからず。『和漢三才圖會』には、京師の二聲、瀧野澤角兩檢校が御曹司と淨瑠璃との情事を綴りて語れるを始とすといひ、また、『窓の須佐美』には、薩摩淨雲をいふも

の、世俗の悦ぶやうに文句を作りて、曲を始めにして、淨瑠璃といふものを立て、作りしゆゑ、世は淨瑠璃と稱すといえなれど、小野のお通が書きし草子も、淨瑠璃十三段草子と名づけしを基として、之に類すべきものをすべて淨瑠璃といふならむと、説く一般に信せらるゝが如し。お通の草子を作れりといふ説の中には、お通が淨瑠璃十二段草子を作れりといふ説の中にも、草子の成り立ちにつきて、お通の記す所同じからざるが如く、お通は傳に至りては、詳なるお通は勿論、年代すら判然せざる也。『昔々物語』には、信長重き疾より、お通が給ふに、お通がまづりしお通、面白き文を作りて御心を慰めむと、源義經矢矧に、淨瑠璃に戯る、事を綴りて讀む。後には、信長お通に、お通の二句當、三味線お通はせて彈奏。面白き事限なく人々感に堪へたりと云へり。これ、嘗て世に信せられける説也。『江戸名所』には、秀吉の御臺所の上崩にてお通といふものを、十三段に書記して上りしを、筆勢玉をのべたる如し、お通のものをすて置かむは惜しき事ぞとて、秀吉岩舟檢校に仰せ、節を付けしめられし也といへり。されど、岩舟檢校は四代徳川家綱の時

代の琵琶法師なれば、『江戸名所』なるは年曆合ひ難し。なほ、お通につきて、異説あまた傳れど、お通といふを皆察す。

さて、お通の事蹟につきて考ふるに、『川岡雜談』の著者は、お通が信長秀吉に仕べしとの説年曆合ひ難しとまづ疑を存したりき。『南水漫遊』には、元和二年三月五日お通五十八歳にて歿せぬとあれど、元和八年十一月の眞田信之乃消息に、お通を松代に迎えて老を養はんと記してあれど、お通も疑ふべし。今假りに八年を後る、お通十年をより、寛永十年のお通、お通齡耳順を過ぎて歿しきとするも、お通は永録の始めに生れぬるお通、なるべし。されど、お通が信長の疾を慰むべく草子を作れりといふことうけがたからざるや。且元龜三年のお通、田裁座頭淨瑠璃を語りしよと、山科玄經郷日記に見えなれど、お通十三段草子を綴りぬといふこと年曆合ひ難しといふべく、お通が草子の作者ならぬかと疑ふべし。

種彦の『環魂紙料』には、淨瑠璃が十三段草紙に起れりといふ説はさもありぬべし。信長の侍女の作といふは非なり。天文九年の守武千句に、

前句 ひととせは座頭をがひの枕つきの

附句

淨瑠璃かたれともし火のもと

又附

ことひはや時はうしわかふけはて

せありて、當時己に淨瑠璃の行れたるを知るべし。天文九年は信長の九歳の時也。淨瑠璃といふもの、幼稚の者を慰めむと綴りたるものをも見えず。「宗長日記」享祿四年の條も、田舎わらひする小座頭の淨瑠璃うたへるとあるによりても、淨るりは古くよりありしを思ふべしといへり。淨瑠璃乃祖なる草子の、か通によりて綴られたりとの説よく非ならざるや。

三味線の濫觴につきても、諸説さだかならねど、中古琉球より傳へし器なることは人の知る所也。其の器元より三弦にて彼乃國人の翫びしことは、「中山傳流録」「琉球聘使記」等の書に見ゆ。「大智」「竹豊故事」等の書も、永録のころ渡りぬといへど、文録のころ、石村檢校より彈き出でし故之と始とすといへる説なほ信すべし。淨瑠璃三味線のことは、澤角檢校を祖とすといへる「三弦考」の説に従ふべし。「松の落葉」に、かの中ぞろより石村虎澤澤住相うけてとあれど、澤角檢校は慶長よりこなむにひき初めたるなるべし。竹本筑後の「鷓鴣の袖」の序に、

淨瑠璃はじまりて百十余年、瀧野澤角兩檢校平家に

久はしく、琵琶乃妙手たりしが、淨瑠璃物語といふ双紙をつゞりあして、樂師乃十二神をかたどり、十二段といふふしをかたり出せり云々、

といへり。兩檢校淨瑠璃物語をつゞりしとは、十二段草子を綴り直して語りさせなるべし。されど、淨瑠璃三味線の起りは慶長のころたにありて、淨瑠璃の起源は遙に百余年の前にありて定むべし。われ思ふに、淨瑠璃は説經より分れて、平家と取りて作るもの也。説經とは、「春台獨語」に、

もせ法師の中に説經師といふものありて、佛法のどうとき事をも詞につゞり、淨世乃哀に悲き物語を演じて、因果の報あることを物語につゞりて、是にふしを付けて哀なる様にかたりなし、ぼたの心を起しめむとする也。

と見え、元と佛事を供養するに、法師を招きて聽問する説法なりしを、後に説經師とて一業を立つるもの生じ、終に諸人物と變りぬる也。「鹽尻」稿窓自語」にも説經より出でしからむとありて、淨瑠璃が説經より起りしやせは蓋し疑なからむ。

説經の正本に、法藏比丘といふあり。時代かえれて寛永の開板にて傳れど、佐渡七太夫が序に、正とすべし

正本なきによりて、わが家に傳はれる一曲を書肆に與ふよしをいひて、一部乃書が因果を示し諸佛菩薩の本誓をあらはしする、正し古き説經の名殘也。その六段に、上るりと唱へる拍節ありしことを示せり。この上るり節か。世俗の耳にかなひて、都鄙に翫べれたるにあらざるの。小座頭のうたへりといふ淨瑠璃節といふをあれにはあらざるか。種彦か、淨瑠璃物語に起りしとはさもありぬべしといへる、十二段草子を天文のころ、さきぬべき作者の手に綴られ、上るり節に合せて語られたるならむ。かくて、主人公なる淨瑠璃姫の名と後れたるにてもありぬべし。室町時代は、義經記か平家物語と並びて民衆乃翫賞を博したる時代也。義經の事蹟に關したる材料乃多く謡曲に採られたるによりても、其の草子がよろしに由て、都鄙乃嗜好を博し得しからむと推しはかるべし也。

さて、十二段草子につきて、世には樂師淨瑠璃光如來本願功德經に、如來の十二願をとき、並に十二神將を説きぬれば、其の草子に十二段を立てたりとい説ありと、恐くは古文學につきて、その卷數に意義あるが如く、佛教に事とせたる例の佛者のしわざならむ。思ふ

に、其の頃盛に行れし平家物語の卷數によそへたるもの、樂師の十二願十二神將と數の同じきは、蓋し偶然ならんのみ。

平家讀みは、古く世に行れたる語り物也。十二卷の平家物語に拍節を付けて、琵琶法師の語り出でたるもの也。その悲壯なる絶調は、深々世の嗜好に適ひぬる也。かの草紙は、あれにならひたりしとせ、淨瑠璃が發達するにつけて平家の諸節の自ら假入したりしとせ、吾等は淨瑠璃と平家との關係深きとを推想するに難らざる也。

されど、初期に於ける淨瑠璃は、極めて幼稚なるものに過ぎざるなり。まま、好事のもの筆を着けたりしとあらざるも、舞の本、御伽草子をも淨瑠璃に語りしによりて、見るべき作のなかりしとせ、新作の稀なりしことを推しはかるべし。若し、初期に行れたり覺ゆる淨瑠璃を見わたせる、戦争にかゝるものと、宗教に關するもの、全きものを占めたりしか如し。時をさへに擾亂の時に方りたるを、材を戦の物語に求めぬりしはさをありあむ。宗教に關するもの、多き、これ淨瑠璃が説經より出で、因果の理を示し弘法の方便たりし昔日の面影を留めたりとやいはまし。

幼稚なる淨瑠璃が、その發達に最も負ふべき多かりしは、謠曲ありと云ふべし。そも、淨瑠璃は、若くはすべて六段の續きものせき。あれ、十三段童子を裂きて六段を書きわけたるならむ。京都にて、井上播磨はじめて約めて五段を立てたり。おど、能の番組と同じく、初段は脇能、二段は修羅、三段は萬事、四段は脇所作、五段は祝言の心也といへり。はた、竹本筑後が、淨瑠璃に師なし謠曲を師とせよといひあるが如き、樂として謠曲として、淨瑠璃が謠曲に負ふ所多かりしと著しき也。

若し淨瑠璃をその發達を專にしたる、元祿享保以後に於ける淨瑠璃に徴するも、謠曲と關係の甚だ密にして淨瑠璃が謠曲に負ふ所の甚だ多きを見るべし。淨瑠璃作者として眞に豊富をたたふべきは、近松門左の文章にぞめたり。しかも、彼が謠曲を本としてこれを翻案し、まゝ、その文辭を摘骨脱胎せしむる、その文句をさながら引用して文華を添へたる、詩として淨瑠璃が謠曲と離るべからざる關係を有するを疑を容れざる也。

そも、説經は、はじめは因果の理を示して弘法の方便ありしがやうく、佛教が離れて單なる謠曲の

となりぬ。淨瑠璃は、源をこれに發したるならむとは己に説きつ。怪しくも、希臘、支那、印度などの諸國に發達したる戯曲、また濫觴を宗教に發して、後漸くこれと相隔たがたるなりき。言語やその及ぶべき範圍甚が狭からざるを得せ。若し、草味乃民限りな淨瑠璃庭に集りたる、樂しき法話を心のゆく限り聴くべきを得ざるも、讚歌もあれば單調に流れて飽かず覺ゆべき也。容易に理解し得べくして、飽きたる彼等乃心を滿しびべきは、俳優をしてその科介によりて、神れ不可思議なる力を面あさり、現せしむるをよき。かゝて、戯曲と演劇とは彼の國に起りたり也。されば、彼はこれを目に訴へ、此はあれを耳に訴へたるの分別なきにあらざるを、その濫觴相似たるものなくをあらざるなり。

なほ、淨瑠璃の發達變遷に就いては、論せざるべからざるものあれども、姑くこれを他日譲り、更に脚を改め、諸君に見ゆるものとすべし。

成功熟を排す

石島 薇山

美なる哉成功の名。情想熾んにして覇氣鬱勃たる若う人の耳には、さながら天來の福音の如く響きて、身内を廻る若々しき血汐の躍るを覺ゆべし。げに、人生これあるが爲めは活動あり、前途に一道の光明を認えてわが世始発て榮あらしむ。大誰の之を愛し之を喜ぶるものぞ。

然りて成功は名や實を共に俱に美也。若し近時感念に唱導せらるる所謂成功の、有せる内容を、果して爾く眞面目なる健全なるそれなりとせん乎。吾人また何をか言はん。はら走、靈の雙手を擧げて之を賛し之を迎へずんばあらざるべし。蓋し、この風潮の輕浮淫靡なる戀愛熱に比して、蓋し、この眞實なるは事實なれば也。而も流行といふ語既に多少の非傾向を含有す。況んや之を亂用するに至りてその害圖るべからざるものあるをや。吾人茲に於て、頗る杞人の憂に堪えざらんとす。

吾人は思ふ、今の「成功」を説く者は大むね青年の儂

倖心を挑發し、投機心助長せるの惡魔也。彼等は偏空想に走る青年を煽動して、一種の廢人たりしむるの弊を、世に讀者よ、吾人が言を矯激なりとする勿れ、吾人實に自らしむる信するに足るの理由を有せる也。

何の世世何れの時や、成功にあはがるもの多し。平眞にその果實を收むる者の寥々たるは否定すべからざる事實也。たゞ、夫れ然り、之を望むもの愈々多し。之を得る者も、少なからんとす。至る迄、その競争漸次激烈の度を加へんや。成功要訣、成功捷徑等、變則的、速成的手段を講じて、偏然に排他され、事おするに至らば、其の害甚真に恐るべき者あり。蓋し、折時目的を見ず手段を顧みざるもの比、然るに、彼等思へば、言ただ成功のみ、人爵のみ、學問何ぞ、道德何ぞ、がくして偶然の機會をのみ是れ窺ふ。憫殺す、渠等眞なる成功の大なる修養を要するを悟らざる。其だ、是は時代の過渡期に際して偶然の奇捷を占めたる今の、はゆる實業家輩を理想とする者あるに至る。禍なる哉、今の成功鼓吹者はかくして有爲の青年を驅つて一種の投機師たらしめんや。見よ、所謂成功者の、上ドモデルとして彼等の説く

處はモルガンにあらざるや、カチキキに非ざるや、ウジ
 タービルドに非ざるや、その他某々、某々の徒らづれの
 一世を籠蓋するの英傑にあらざるべき。されど人自己の
 天職を忘れて、妄り不稽なるが空想の奴隷たるに
 至るは殆ど殆どはあらざる。今若し萬人盡くカチキキを
 氣取り、モルガンを崇拜して、一意之が模倣を努むる
 あらん乎、その愚や真に及び易からずして、その流毒
 や寒心に堪えざらん也。蓋しカ氏の如き單に一個の平
 民をして之を見るも、その見識の非凡、その精力の絶
 倫、その才幹の偉大等幾多敬重に値すべき美所を有せ
 り。氏が今日の成功は幾分天運に依るべき美所を有せ
 しと雖も、而も氏にしてまれが機會を利用するの才略
 なからんには、笑んぞよく茲に至らむ。カ氏が今日お
 るは誠に偶然に非ざる也。
 更に思ふ、カ氏や、モ氏や、地に遺利多き米國に在
 りて、なほ且つ千百萬人中僅の屈指に價するの人のみ
 以て一般を律すべきに務らむ。古哲曾て曰へり、呼
 ぶる、もの多く選る、者甚しと。幾百幾千の青年は
 野心の指嚆に會ふて盲進し、空しく無名の犠牲となる
 に過ぎ。一將功成りて萬骨枯る、者比々然るに非ざるや
 吾人はなほ記せり、往年政治熱の熾んに勃興するや

天下の青年を擧げて政治家志願者たらしめり。か久し
 て民權を叫び、自由を呼びて狂奔せるの結果は、産を
 破り身を滅ぶ、遂に恒産なく恒心なく、破落戸と逕庭
 なき所謂壯士の一團を現出したるに非ざるや。はた又近
 時文學乃普及に連れて自稱文士相踵ひて荷出し、天下
 有識の士が憂慮を買ひたるに非ざるや。這般の愚現象は
 をも、國家を毒するおと幾何ぞや。今の成功渴迎者
 流、幸ひにして當年の情落を再演せざらん可也。
 或ひは言はん、偉人を崇拜するは吾人の特性也と、
 然り、多々の場合に於て偉人が驚天動地の大業は屢々
 吾人が情心を鞭撻し、叱咤するの効あるは事實也を雖
 も時勢の如何に顧慮せず直ちに偉人が行爲に倣はん
 するが如きは甚だじき危険と言はざるべからざる。世俗
 の道徳は社會と共に推移す、當年の正義は未だ必ら
 しも今日の不徳たらざるを保證するの時、妄りに之が
 方法を襲用して顧みざらんば彼我乃損失幾何ぞ。且つや
 眞なる成功は一に人格を待つ、妄りに功業の赫奕たる
 に眩惑して根本を顧みざらんば何の由か眞なる成功の果
 實を得ん。借問す、今の成功鼓吹者は果して這般の要
 意ありや。
 若し夫れ本邦の所謂實業家輩と崇拜するに至つては

眞に懼るべし。人非常の場合に遭遇して往々にして力
 量以外の成功を擧得するあるは事實也。蓋し社會の秩
 序全く破壊せらるゝに迫る、奸才ある者往々賭博的
 陋劣手段によりて意想外なる成功一眞の成功なりや
 否やは姑らく措かん、一を占むるは未だ必らずしも難
 からざる。故を以てその一代の經歷や多く罪惡也。その
 品性や劣、その人格や陋、僅に富を擁するの故を以て
 社會に傲るのみ。而もおれら僥倖的成功者は何等執る
 べく、學ぶべき長所あるにあらざる。強いて之を擧ぐれ
 心漁色のみ、無情冷酷のみ。而して今日の成功者が崇
 拜物は是れ也。千葉江東氏曾て論じけむ、完全なる一
 個のセントルマンをしての成功談よりも、投機的に成
 り上れる俄分限の「一代記」を望むもの比々然るを聞く
 時、誰の之をしり危険なる惡風潮に非ざるや。
 且つや所謂成功の説く處はた、黄金のみ、人爵のみ
 換言すれば物質的方面に成功のみ。吾人固より物質的
 成功を排斥する者に非ざる。然れども眞の物質的成功は
 又必らずや精神的修養を相成るを要す。乃ち精神的修
 養なくんばその所謂成功はセロのみ。而も今の成功論
 者は之を迂拙なりとして顧みざる也。故を以て彼等
 は偏へに黄金の多寡によりてその人物を品評す。彼等

が論法を演繹し來りば、車夫馬丁にも劣る品性下劣な
 る人物なりとも、富強らば則ち成功者中の一人たるべ
 き也。されど、噫去れど、吾人は己に一平沼某に飽く
 。今後黄金の權化たる拜金宗徒の養成を望むる要なき
 を奈何せむ。
 更に又之を他の一面より見るも、所謂成功は社會的
 平和を破壊するもの也。何んとなれを一人にして暴利
 を壟斷する者なれど也。十人にして有すべき富を一人
 にして掌握し去る者なれば也。貧富の懸隔之が爲めに
 いやしく甚だしく、貧者は永之に塗炭の苦に陥らむ。
 人の此の世に生るゝ未だ必らずしも先天的に上下の區
 別あるに非ざる。神の眼には均しくそが愛子たらん、た
 だ或者は貧家に生れ、ある者は富家に生るゝも、所詮
 は社會の組織のなほ不完全なるがためのみ。吾人は興
 入限り不公平なる區別を打破せざるべからざる。貧
 富均一は人類最終の理想たり。成功論者よ、卿等は所
 謂成功者を贊美するに先もて、先づ他の敗殘者乃現狀
 會の幸福を唱ふべし。請ふ米國に見よ。同國が收
 むる富の九割は一部少數富豪のポケットに入りて、
 僅にその一割のみ一般人民に頒たるといふは非ざるや。

かたしてなほ人權を云ひ、平等を唱ふ。かたしてなほよく承之に平和の夢を貪り得と云ふ乎。再言す、吾人は吾國今日の國情に見て、そのあまりに拜金宗徒の夥だしきに倦たり。政治家も、軍人も、宗教家も、教育家も、その他社會のあらゆる階級を通じて、黄金の魔力に酔へるの時、久ら如き風潮を鼓吹せんとするは、例へば炭をたる火中へ、油を注ぎ、薪を添ゆるが如けむ。百害ありて一利あるなし、吾人は斷々乎排斥の聲を擧げんとせ也。噫成功熱!! 成功熱!! 懼れて恐るべきはこの惡風潮也。世の濟世に志ある士は須らく留心する處なかるべからず。

時言數則

狩野形外

老成の風

近時の青年の中學課程を終へたるもの杯は、著しく老成の風ありて、或は淺幅を脩むる事、或は言語動作等の上にて、小心翼々、一先進の遺迹を踏

み。その意を迎へんとするの風あり。され、わたりは喜ぶべき事にして、時勢の進歩の彼等を感化せしに由らざるをあらせ。されば世の事はすべて一得一失、この老成の風の如きも、予は世人の早晚其の弊に墮へざるの期あらん事を思ふるもの也。

青年は字義よりいふも、Young generationなり。其の本來の意義は則ち進歩、發展、活動等あらゆる積極的事實の上に存す。即ち青年は文運の進歩に與り、道義の廓清者なり、眞理の闡明に従ひ、國家の富強と計るべき運命義務を先天的に附與せられたるものなり。故を以て人は其の青年時代に於て、万般の行爲を進歩、發展を旨として律せざるべからず。國家一人も多くの進歩的青年をもつば、一日も長久其の國利、民福を支持し得る所以なり。

氣鋭の時に其の直截の正義が世の俗流の光に壓せらるゝが如きを見れを以て『語るべからず』とし『若し』となす。これらの輩は所詮進歩を志す青年の齒すべきものに非ざれば、其の社會國家に害毒を流すは決して尠少に非ず。吾人は何よりも先に、彼等の惰風を排し、彼等を勢力範圍外に衝き出さざるべからざる也。

而かも彼等の或者は、或は青年が進歩、發展を理想とすべきは素より論を俟たず。されば人はいつまでも青年たる事能はず、年齢長れば社會を知らざる可らば。君の母國所の如きは愛すべしと雖も、尙机上の空論たるを免れざる也。然る勿論此論が不惑の人の口より出せし首肯するを辭せざ。然るもか久遠ふものは乳臭の青年にして、其の説は何等耳傾くべき實質なきを如何。先づ彼等に誨めべき事は、邦人乃至一般に早老なるの事實なり。若隱居する事なり。日本人には眞に青年と稱すべき時代は甚だ短く、已が信する所を固持して世に當り、時運蹉跎を辭せざるが如き有望の時代は甚だ短きに過ぎ。故に年少の客氣は醇化の期な久して消滅し、殘る所はよろづ消極的なる人に過ぎざる也。

然るに何者乃痴漢ぞ、妄ま退嬰、小心、婦女子を學び、老者を學び、滔々たる所謂時勢なるもの、流に任せて東流西轉、己が取らんとする職業に貢獻せんとする進歩改革の理想もなく、英雄を知らんよりは、交際を學び、シエイクスピアを讀まんよりは、駄小説を評論し、以て得々『社會を知る』となし、其の同輩が年少

斯の如く我國の人は早老にして、社會の地位を得て志す所を行はんとする前に充分なる精神修養をなす能はざ。爲めに長じて後を、其膽や小なる事豆の如く、神經は徒ら過敏、小事に一喜一憂し、人の非を許さ小策畧を弄し、毫も練々の餘裕あるな久、國家の隆替の如きは多々おれを知らず。世界にわたれる人道の光の如きはまるで夢の如く、其れ規模の小にして婦女子に似たる憐むべきに非ざや。

幼兒の心を死期まで有するは英雄なりとかや。願くは世の青年は如上の惰夫の消極的思想を學ばざらん事を務め、それがため時に或は矯激に失するも願みせ、飽まで向上の精神を以て、進歩、發展を理想とせよ。神はかゝる正しきものに榮光を與へずんをあらざるなり。世の先輩なるものも、徒らに小心翼々、沈香も焚かず、屈も放たざる青年のみを喜ぶなかれ。青年の云ふ所は勿論完全には非ず。欠点は當に綱目如くならんも、其の旨や正しく清きものなれど、これを愛してこれを助けて、共に進歩の光を追はざる可らず。最も頼もしい社會は青年が侃々其の主張を乃べ、先輩が古久其の志を体して扶掖指導する所の社會ならんべから

ざる也。

輕佻の風

今日の青年が多く老成の風あるとは勿論惡現象なるはと前にいへるが如し。活氣あるべき青年が老成の風あるは即ち不自然の現象なり。故を以て其の取る所の主義…老成の風…は勿論僞善に外ならず。爲めに彼等の半面には忌むべき輕挑の風を生ずるに至る。

由來輕挑の風は小國の民に多し。日本は素より小國なりと雖。古は人皆快活にして眞摯、よく勉めよく働きたりき。少くとも神武天皇の道は斯の如くなりき。然るを累世國に大詩人、大哲學者、大宗教者なかりしとて、一國に特有なる共通の理想なるものなく、思想界の事は一よみおれを外國に仰ぎ、或はこれを三韓よりし、或はこれを唐よりし、維新以後の如きは最も急速の度を以て、西歐の文明をバ一も二もなく輸入し醇化を飲ぎ、調和を飲ぎ、爲めに滑稽至極の明治時代を生じたりき。

斯の如き統一なき文明にて眞摯なる國民を生せず。我國民の如きもまた極めて突飛、滑稽、輕挑の風に侵されき。今日の青年が一面輕佻の風あるは、また長者の此の如き惡風に感染しふるに過ぎざる也。

なるべし。

然れども吾人はすでにかゝる敗徳の時代に生れ出でたる以上は、如何なる困難ありともこれに打克ち、兎にも角にも、己れだけは高潔なる性格を保たざる可からず、たゞ困難を稱して、徒に身を惡風潮に浸人するまかせ居るか如きは、決して男兒の勇敢なる生活とはいふべからじ。かゝる時の堅忍不拔の意志はあれ誠に眞の勇氣といふべきも乃なり。

今や道義の頹敗は神聖なるべき教育者にまで及び、各中等程度の學校に職を奉ぜざるも乃にして、周圍の中にあるもの、正に百を以て數ふに至る。かゝる不祥の事實はもとより前代未聞にして、おどが爲に各中學、師範、高等女學校等に在る青年處女に惡感化を與へたる事幾何ありとするぞ。わが熊谷中學の如きは、高くあゝる濁流の上に一頭地を抜き、一人もかゝるあさましき輩は出さざるは慶すべしと雖も、一般にいふ時は數多き醜類のために全教育界は大汚辱を蒙り、校長の説く倫理の講義の如きも、著く其の感化力の衰へたるは明かにして、輕薄なる生徒等はかゝる事實に感染せられて、其の道徳の規を逸したるもあるべき也。かゝる時にありては、吾人は益す道徳的勇氣を養ふ

さをも變遷又變遷、時は暫くも止まる事をせずして世界の氣勢は刻々急なるものあるに當り、我國人殊に青年は何時までも惰眠を貪り、喜劇を演じつゝ、ある可らず。瞑目一番、確固不拔の理想を定め、おれを現化するを心掛けざる可らざる也。

今日の青年は兩三相集まれば、談は即野卑、陋劣、平凡、駄洒落、毒舌、おれを隣室にて洩れ聞くとするも、なほ齒のうく思ひをせざるべからず。斯の如き惡風は決して國來の休戚に關るべき青年として喜ぶべき事にはわらじ、予は愛する學友會がかゝる惡現象を排する識見ゆらん事を望まざるを得ず。かゝる如き惡風を避くるには、主として多方的趣味の養成を志すべし。談ずる人みな文學、藝術、科學、及社會萬般の趣味ありとせむ、其話柄の趣味を實益ありて、高尚優美のみならず、善相責めて、遂には眞摯にして快活なる進歩的青年を見るに至るべき也。

精神的獨立

正義廢れて道徳地に墮ちたる時代に於て意味ある生活をなさんは極めて困難なる事也。されば今日のごとき世に於て自ら信ぜる所に立ち、行くも戻るもやましき所なきは、非常の決心をなすに非ずんば出来がたき事

ざる可らず。社會は多く汚れ、己が教を受くるものまで汚れたりて、俄に失望すべきもあらず。人はせめておれ先づ己れだけの心を清うするを力めざる可らず。釋迦の教へしが如く『三界無情只道可憐』なり。吾人はあゝる精神的獨立の地に至り、己が行爲の本據を清くし、出處行爲一に義を以て決するの勇を養はんおとを勉むべし。かくして一人清うらむ、一鄉清く、一郷清からば一國其乃品位と富強をを増進するを得可き也。

休暇の利用

休暇は既に終れり。諸君は此間に何事をしたまひし乎。或は學課を勉學せられたるもあるべく、或は小説を讀まれたるもあるべく、或は旅行せしもあるべく、或は運動に力めたる健兒もあらむ、されば予は今お、に自らの経験を述べんとす。

今日れ世の中は其の如何なる方面なるを問はず、生存競争極めて激甚にして、一步を誤るときは、空しく才を抱いて老いざる可らず。其の物凄き事まるで戦争の如き也。故を以て苟くも成功の冠を戴かんとするものは、ただ枯坐して苦學するのみにて安んじ可らず、將來已が入らんとする方面の有様を窺ひ置かざる可からず。而してかゝる事は學窓研學の間にては充分ならず

とろしく休暇を利用して充分知り置く可き也。あの戦争の世の中に平生の勉學を練兵とせよ、休暇には宜く敵の陣を偵察し置くべき也。

先輩に對する態度

今の青年の先輩に對する態度に二つあり。一は先輩をなきもの、如くに考へ、已れ獨りエラがる也。二は先輩の云爲する所は何でもよしと思ひ、一々御尤と默從する也。蓋し熟れも正鵠を得たる者には非ず。

先輩に對しては勿論尊敬せざる可らず。またその何れの点にて尊敬すべきかを知らざる可らざる也。たゞ徒らに、一も二も先輩なりとて、尊敬するは、實に自己の不明を表白するのみならず。先輩に對しても正當の尊敬にはあらずる可き也。先輩を尊敬するは、主としてそが己の進路を導く燈明臺なれどなり。己が模範とすべきものなれば也。然るにこれらの特質も無きものを持つてはやすはやうなき事也。

文學の種類

文學を以て單に己れの性情を美しく、自然と人生とに於ける鑑賞の能力を培ふを旨とせむ、其の接する作物の種類を擇むざる可らず。ただ妄りに文學の美名に酔ひ清濁優劣を論せざるが如きは、賢き文學鑑賞家と

頗る現時教育の弊を論じて其旨に中れるものあり。予は全く薇山の説を贊すれ共、如上のセレクシオンは極めて必要なりと信ぜ。即ち不知歸。思出の記。等は推擧の値あるものなるべく、神田リイメーにある、カサビアンカの如き人生の詩の如きは尤も優等なるものの中なるべし。

青眼白眼

石島 薇山

雄大なる詩歌

雄大の詩、豪宕の歌、約言すれば男性的趣味を歌へるの詩、これ吾人の渴望しつゝ、ある所のもの也。思ふよ、文學をして獨り繊細優美の一方面に局せしめんとすれむ則ち止む。苟くを豪壯美あり、雄大美あり、審美學上儼として一地位を占めつゝ、あるを思はむ誰か渠をのみ重んじて是を卻け、以て畸形的文學の發達を促がんとする者ぞ。這箇褊狹なる趣味性は、國文學の進歩發展を阻碍すること、決して尠少ならざれを也。

はふふべあらじ。

殊に今日の如き文學の盛なる世に於ては、ただ文學といふ名目の下に無數の作物は提供せられ、その題目と廣告のみにては、果して何れが最もよきものなる乎を判するに苦む。茲に於て己れに一定の業務を有し、其の閑暇の幾分を文學の鑑賞に樂まんとするもの杯は如何なる種類の文學が可なるかを知らざる可らず。

人の文學に對する嗜好の其趣を異にするは、なほ其の面の同じあらざるが如し、或は悲哀の調を取るもあるべく、或は艶麗を喜ぶものもあるべく、或は幽玄、或は豪壯、其差あるも甚多き也。かく其乃嗜好は異なれ共、所詮文學をただ鑑賞するに止先バ、そを讀みたるが爲己れの精神に傷を止むるがごとき種類の者を棄てざる可らず。もし然らざして或は女々軟軟文字にて些の光明なきもの、或は反道徳的のもの等と見、そがために人生行路の難きを排して己が理想に進まんとする勇猛心を銷沈せられ、尙進んで文學の最高の美を探る能はざるが如きは、其の愚むしる大に憐むべきものあり。要する文學は讀者に人生の意義を傳へ、慰藉を與へ、活動の勢力を與ふるものを取るべき也。前號に於て薇山は中學生に文學の必要なるを説きぬ

吾人會て『秋水』誌上よ於て論せし如く、我が國文學は古來甚だしく這種の文字に乏しありき、固より色に溺れ、酒に酔ひ、菅の根の長き春の日を、櫻かざして遊び暮らす外、何等の能なき大宮人よ向つて、男々しき吟詠を出ださんことを望むは、寧ろ望む者の愚也と雖も、しつすがに猶ほ萬葉集には、二三壯大なる文字なきにしもあらず、試みにその顯著なる一二を擧ぐん歟。

天地の別れし時ゆ、神さびて高く尊き、駿河なる富士の高嶺を、天の原ふりさけ見れを、渡る日の影もかくろひ、照る月の光も見えず、白雲もいゆきはをかり、ときとくぞ雪はふりける、語りつき言ひつき行かん、富士の高嶺は。

田子の浦ゆうち出で見れば眞白よぞ富士の高嶺に雪はふりける

是れ山邊赤人乃作よして、古來人口に膾炙せる所、詞句の謹嚴にして、調の壯嚴なる、一讀人をして襟を正さしむ、神洲の靈山を詠じ盡して、又餘蘊なきものをいふべし、短歌にありては、

久堅の天ゆ久月を網にさしわが大君は衣笠にせり天の海に雲の波たち月の舟星の林に漕ぎの、る見ゆ

なくはしきみなみの海に沖津浪千重に隠れぬ大和島

根は 天皇の神にさせせ天雲の雷の上に庵りせるかも

劔太刀いと、研ぐべし古へゆさやけく負ひて來にし
ろの名ぞ

富士の嶺を高みかしまみ天雲のいゆき憚りまなびえ
らしも

如上、或は大君の徳を頌し、蒼窮の大を賞へ、壯大
の文字の裡、敦厚純朴なる太古の民の俤を偲ぶべから
ずや。その他鎌倉右大臣實朝の金槐集の如きも、多少
おの種の分子を認むべし。徳川氏に至りて加茂眞淵盛
ん、雄大を説きぬ。

武士の矢並つくらう小手の上に霰たばしる那須の篠

原 實 朝

はこね路をわが越え久れ心伊豆の海や沖乃小島に涙
のよる見ゆ 實 朝

時により過ぐれば民の歎きなり八大龍王雨止発たま

へ 朝 朝

信濃なるすがの荒野と飛ぶ鷲の翅をわに吹久嵐か
な 眞 淵

然れども、過去二千五百餘年歴史を通観すを

此の如きは極めて稀少にして、多久見るを得べからざ
る處、吾人は遂に之が缺乏を感せざるを得ず。

思ふに之を種々乃因あるべし。されど予輩の見る處
にして謬りならずんを、我が國語の性質上より來れる
もの、與つて力多きを確信す。蓋し本邦語の特性ある
多く暢びやかにして優しき點に存するが如し、故に、
潺湲たる春の小川の、散り來る落花の二三片を載せて
靜りに、いと靜かに流るゝの趣きを詠じ得べけんも、
狂瀾怒濤、澎湃として巍巖に激し、白雪と散じ、珠玉
と碎くるの壯觀は、遂に寫し得べからざる也、試みに
左の詩を誦せ。

Roll on, thou deep and dark blue Ocean-roll!

Ten thousand fleets sweep over thee in vain;

Man marks the earth with ruin - his control

Stops with the shore; - upon the watery plain

The wrecks are all thy deep, nor both remain,

A shadow of man's ravage, save his own,

When, for a moment, like a drop of rain,

He sinks into thy depth with bubbling groan,

Without a grave, unknelt, unconfined, and unknown.

又は是れ英國の文豪ロード、バイロンが、オーシヤン

(大洋)の詩也。その調のゆかに激越よ、その辭れゆかに
に痛快なるかは、一讀直ちに何人の腦裡にも、映象し
來る感ならむ。而もこれを邦語に譯出し來らんか、恐
ら久原作が有せる妙味の、開か十分一をも寫し得ざる
べし。今左に之が和譯を示さむ。

捲き轉がれよ、汝黒き深き蒼海よ、捲け。

一萬の艦隊汝の上を一掃し去るも徒爲なれや。

人は地上に荒廢の跡を留むるも、其の力は。

濱邊に止まりて、大海原の上にては。

破壊は凡て汝乃なす業。

人為の破壊は影だに残らず。

僅に残るは彼が自滅のみ、一滴の雨の如く

墓なく、甬鐘な久、柩なく、知る人もな久、

泡たつ陰さと共に、汝が底へと沈み行く時。

(山縣蠡湖氏譯文)

諸君、は右記の譯詩によりて、果してよ久原作に於け
ると同等なる興趣や悽愴の氣に打たる、ものありや、
否や。蓋し何人もイエスと答ふべく敢てするを得ざる
べし。

ロール、オン、よの一句は、荒れ狂える怒濤を形容
し得て、陰森、幽黯の態を極むと雖も、譯句は果して

此の如きパツ、ありや。所詮は原作に比して、甚だし
く弱く力なきを見む、而もされ断じて譯者の手腕の幼
稚なるに由るに非ぞ。然らむ則ち單なるよの一例によ
りて、一掃以て全鼎を覗ふに足るべく、又吾人の斷定
乃妄ならざるを證をべけむ。

然り、わが國語の缺點は、疑ひもなくこゝに存す。
例令バイロンを凌駕するの大詩人出で、悲壯の詩題
を題はんとするやを。現今の如くんを、充分にろ詩
的手腕を發揮し得ざるべし。是れ豈斯界の恨事に非ず
や。さあれ、近時識者れ眼をこゝに着くるもの多く、
國語改良の呼聲漸く高まり來らんとするは、言ふ迄も
なく斯界の慶事也。かくして止まらんを、遠からせし
てこの缺點を除き得べく、又隨つて今後の文壇は、お
の方面に向つて多大の發展を遂ぐべきを疑はざる、吾
人は必然の結果の、しかあらんを切望して止ざるもの
也。

吾人の今更らしく此の問題を暇々するは、蓋し近時
青年文士の態度に慊らざるものわれを也。國語の短所
は奈何ともすべからせと雖も、能ふだけ雄大跌宕の詩
材を選んで、努めておの缺點を補ふは彼等の任ならせ
とせんや。而も彼等相率ひて艶柔な傾き、優婉につき

ろの弊や、遂に柔懦淫靡の惡風を馴致するに至らんを恐る。見よ、青年文士の趨向を見よ、戀に泣き、董に泣き、蝶に泣き、女に泣き、その他到る處メソソと涙を振り撒く優男は、吾人之を隨所に認め得と雖も、豪宕の辭、跌宕の想、一讀人心を旺ならしむ底の大文字は、遂に之を尋ね得べからず、かくして有爲の青年は、神經質となり、涙脆き風流男と成り、果ては女性的たらんとす。一片歌々の氣あるもの、誰か慨せざらんや。

曩には鉄幹與謝野氏あり、虎と劍とを以て一家の調を作り、柔情なりし從來の歌壇に向つて、一大打撃を加へしは眞に快心の壯舉なりしと雖も、須臾にして新詩社一派の所謂實感的裸體詩となりしは、深久遺憾に堪えざる處也。律文にありては文學士土井晚翠氏あり。好んで豪壯の詩題を謳ひ、馬前の塵や、五丈原の悲壯の文字となりしが、氏去つて歐山米水の間に嘯くや、又遂に寂として聞ゆるなき也。近者白星平木照雄氏あり、頻りに力をを、ぐが如きは喜ぶべし。憾むらくは未だ吾人を甘心せしめざるを。あゝ濟々たる文壇の多士、遂に俗尙の奴隸たるに過ぎざる歟。浩嘆。寄語す、青年文士諸卿。剛勇一點張りが眞の武士に

非せして、物の哀れを知り、人情の奧秘を解せるもの始て理想的大和武士なるを思は、吾人豈猥りに戀を讚美せるを排せんや。あらず、吾人は諸君が強いて木強漢を氣取り、似而非豪傑を擬し、以て狂暴なる木曾殿の亂行を演せんことを望まんや。たゞ偏へに女性的痴態を學ぶの餘、男子本來の面目を失ふ勿らんことを熱望して止まざるのみ。

繰り返す、雄大の詩、剛宕乃歌、是れ予輩の渴望して措かざる處にして、而も現時閑却せられつゝあるもの、若し後進俊秀の士にとりて之を充ふを得を、獨り吾人の喜びのみならざる也。

娛樂としての月並俳句

人は言ふ、俳句は平民文學也と、はゝにハハ平民とは、常識を具せる人格をハハなるべし。去れどハハれり、俳句は決して平民文學に非る也。試みに、未だ俳句を知らざる人士に向つて、

心太倒まに銀河三千丈

蕪村

御手討の夫婦なりしを更衣

水洞れハハ夢わらぬの齋麥が否か

河童の戀する宿や夏の月

鞠走る友切丸や時鳥

等を示して、之が有せる内容の思想を説かしめよ。渠等果して曲りなりよも之を解釋し得べしとする歟。予は肯んせず。

俳句はポエトリー也。俳人はポエット也。之を解し、之を作るべく、特別智識を有せざるべからず。乃ち美の何たるかを知り、審美學、修辭學の素養なりうるべからず、而して獨り俳書を涉獵するに止まらず、あらゆる文學に通せざるべからず。然らずんば、誠に俳句を作り、俳句を解し得べからず。

或は言はん、汝のいふ處は専門家に於ける準備のみ一の娛樂として、業務の餘暇に之を弄せんとする一般人衆は、さまで仰々しき要意を須むざるべけれど。さばれ、詩は専門的也、詩才なき者のよくすべきにあらず。例へば、漢詩、短歌の、何等の素養なき者に作り得ざるが如く、小説、戯曲の常人に草し得ざるが如くむ。均しく是れ詩也。誰か短歌、漢詩作り難くして、俳句獨り作り易しといふ。ろの會々しか誤解せらるゝは、畢竟するに無識なる宗匠輩が駄句を以て、まことの俳句なりを思惟せる僻見をり出づ。明かに之を別ちて、吾人は文學的、月並的の二種となす。さばれ後者の卑俗淺薄は、以て目するに俳句とすべからざるを如

何。予が論義の主として前者に在るはろの處、月並的俳句の如きは、始めより吾人の一隊に附したる處なりき。文學として見んには、月並句はあまりに俗陋に、又あまりに膚淺なり。

然り、詩として是を見れば、三文の價なし。その歌ふ所は美にあらず。地口、謎、口合と相去る僅に一步のみ。吾人の眼中に置かざる所以也。疑ふ者は乞ふ去つて梅室、蒼虬、鳳郎等、下りて蠢爾たる現今宗匠輩の句に見よ。渠等、芭蕉を崇むるに神を以てし、妄りに古池の句を口にすと雖も、よくその眞諦を道破したるものなきに非ずや。抽象的、理屈的に非せんを、彼等はよく解せざるに非ざや。寂味を唱へて眞の閑寂の趣致を知らず、風雅を口にして而も俗臭紛々たり。甚だしきは辯問を業として、輕佻浮靡、唾棄すべきものあり。實非其角の如き又その一人なりき。現今にありても亦この種の人物に乏しからず。見來れば彼等何んの處に藝術家たるの資ある？ 詩人たるの人格ある？ あゝ喋棄なほ慊らざるは彼等也。擯斥すべきは月並句也。

吾人れ言は餘りに激しかりき。げに文學的方面をとり見れば、彼等は斯道のサタン也。デビル也。されど姑

らく下流社會の娛樂としての月並俳句を見んか。吾人は輩ろ之を勸奨するの要あるを思ふ。何を以ての故ぞ。

吾人は今更らしく娛樂の要を説かざるべし。人は勞働のみによりて生くべからずして、常に一面に於て大に逸樂を要すべきは自明の理也。されそのセラクシヨンは極めて切要也。比して娛樂といふもその範圍廣汎なるだけその利害も亦廣らざるを得じ。従つて人心に及ぼす効化乃度も同じかす。吾人は中流以下の人衆の、精神的快樂を解するの力なきが爲先に、常に快を罪惡の方面より取り、その極産を破り、身を誤り、滔々相率ゐて亡滅に近づきつゝあるを見て、常に撫然たるものなくんば非ず。思へらく、彼等を拯ふはより健全なる娛樂を解せしむるにありと。而して梁等が教育の程度より言ふも、月並俳句は最も恰好のものたるなり。

高尚なる美的觀念は、彼等の腦裡に宿らざるは固より論なし。然れども狂句、語呂合、謎、地口、狂歌、冠附等、實感に訴ふる種類に至つては、彼等の解し得ざる處にありと。而して月並句が最も喜ぶ所は、駄洒落、理屈、淺薄、卑俗、平凡等にして、要するに官能

的快感を訴ふる点に於て、謎等と多久の逕庭なし。乃ち知る、鄙俚なる渠等の趣味性を最も相合ふは月並句なるを。宗匠連はもだ何事にも十七字に纏むれん足れやせし、又その材乃美なるや否やを稽査するの力あり。おれ即ち彼等が解し易く、作り易き所以にあらざや。之を例へて

月花の目を休めばや春の雨 支考
一日は内に居よや春の雨 蝶夢
むつせして戻れ心庭に柳かな 柳太
鶯乃聲に点ひく柳かな 柳居
鹿相なる膳は出されぬ壯丹哉 風弦

等は、厭味多き理屈的の駄句として、吾人の排斥する處なりや雖も、彼等は輩ろ之等を悦ばん。而も此を根りや嗤ふを止れ。彼等は之よりてある慰藉を獲得しつゝある也。已に月並句の彼等の趣味に適合すとせば、進んで之を傳播せしむるは、必らずしも至難の業ならじ。若し夫れ一たび之が趣味を解せしめんか、かのづかづかにして慰藉を以、に執るに至り、又惡現象を呈するの虞なきに至らば、以て幾分社會風氣の肅清を保つ効あるを得む。

思へ、祭典の際行燈に句を記して掲げ、運座に高點

を博して賞品を贏ち得て、彼等の心かに嬉々たるかを譬へこの間多少の非傾向の發生を見るなきに非るも、之をかの賣女の色に溺れ、賭博に熱中するが如きに比すれば、知らずその懸隔果して幾何ぞ、人皆之に至らむ社會の汚氣聊の清められむ。その作る處の淺薄俗陋、取るに價せざるが如きは姑らく問はざれ。彼等の娛樂としては寧ろ高からずや。吾人漫に排斥し去るの要を見ざる也。

敢てははむ。眞なる俳句は之を詩才ある作家に待つべし。ただ娛樂的發句として、や、高き平民的娛樂として、月並句ははよ、之を奨励せよ。冀くを幾分風氣に資するを得む。

所謂健全なる文學

世人や、もすれど、『不如歸』『思出の記』を激賞して曰く、これ健全なる文學也。家庭の好讀物也と。言の獨りこ、に止まらむ則ち可也。唯だ之を柳浪、天外と相對して、蘆花よく二者の上に在りとなし、『今戸心中』『はやり唄』を以て、より劣等也とするに至つては、吾人未だ俄にその可なる所以を知らず。

げにや柳浪、天外の諸作は、蘆花の作物に比して、より多く暗黒面の描寫に富めるは、争ふべからざる事

實也。『今戸心中』は材を狹斜の巻に執り、娼婦と遊治郎との癡情を描けるもの、『はやり唄』は淫亂の血脈を受けたる一婦人の、無情なる夫を恨んで遂に醫士を通ざるを寫せり。もし蘆花の作を健全と呼ぶべくんば、げに是等は不健全の作たるべし。さもあれ、單にその構想の如是罪惡的の方面に限られたるの故もて、直ちに彼よく之を凌ぐといふは、果して正しき藝術批判なりと稱すべき乎。るも、健全とは何の意ぞ。

『不如歸』一篇、敢て之を純潔ならずと言はず、其の想を構ふるや清楚、その文を行るや謹嚴、一毫浮氣を留めざる處、之を若き男女の讀物として勸むるも、毫も害毒を與ふる乃危険なきは、予又之を肯定す。然れども姑らく之を文學的、審美的作物として見る時は、未だ必らずしも傑出の好小説として、激賞に價すべからざるに似たり。

小説は何ぞ？ 誠みに之が抽象的説明を下さば、活ける社會人生乃描寫也と言はん乎。こゝに人情の發露あり、人生の秘密あり。吾人が之によりて運命の蹄趣を洞觀し、人情の秘奥を默會するあと、宛ら小造化に對するに同じ。眞なるノーベルとは、實に此の意義の具體化に外ならず。

翻つて「不如歸」に見よ。その描寫の筆や真に詩的、よく人を charm するの力ありと雖も、その何の頁に活きたる「人」を見む。情あり、血ある人間を見む。ヒーロイたる少尉川島武男、ヒロインたる片岡浪子、彼等時に活躍の妙なきに非るも、動もすれを傀儡の喜怒哀哀樂するが如き感あらしむ。その他の人物、個性あるもの幾何ぞ。滔々是れ類型のみ、抽象的人物のみ。讀過一番、少くとも肚皮裡血あり、涙ある個人の幼影をも思ひ浮てべざる也。敢吾人は斷言す、「今戸心中」を誦して、徐ろに冥想せんか、わが胸裡秘かに人情の琴線に觸る、something の囁きを聞けり。而して「不如歸」に至つては然らざらざるや。知らず、世人は何を以てその書を第一流の傑作なりとする？ 如上の要素を具せずして、而も猶ほ爾く上乘の作たりといふか。

更に繰り返して問はむ。所謂健全は何ぞ？ 人間の醜的方面を避けて、獨りその美なる一面のみを描くの謂乎。陷濟あり、怨恨あり、昏迷あり、罪惡ある人間の眞性の中より、たゞその善的分子のみを抽出して寫すの謂乎。果して然らば吾人はあまりにその趣味の淺薄なるを笑はんや。

人は神にあらず、従つて無疵圓滿は之を望み得べからず。

らす。人既に然り、社會の組織、又何んぞ複雑なりざるを得んや。この裡美あると共に醜あり、惡あると共に又善あるは、宛として汪洋たる大洋の、清濁併せ呑めるに似たり。人盡く君子あり、内に憂なく外に累なきに至らざる限り、清濁相接し、美醜相錯せるもの會々以て社會の眞相なりを知らずや。人は醜穢と呼び陋猥と斥くる花柳の卷も、詩人が燃扉なる觀察を経來る時、人生の眞趣の潛めるに非ざるや。誰か兇惡無慙の惡漢にも、時に熱烈なる眞情の閃きなしといふぞ。

ゑだろれ醜美相交る、かるが故に眞に人情の秘を關かんとする者にありては、勢ひ暗黒の方面にも、その詩材を覓めざるを得ざらんぞ。惡といひ、善といへるも、要するは相對的關係のみ。知らずや、暗黒を描かざるを光明を傳ふるに難し。偏へに光明を尊びて、暗黒を忌避するは、遇々以て光明を蔽ふ所以なるを。

由來藝術と解せざる俗人の、抽象的描寫、單純なる構想に甘んずるは、彼等が幼き鑑識の力の、よきより高さを味ふ能はざるが爲光のみ。彼等が齋に隨喜し更に進みて幽芳等の作をたゞえて之れ健全と呼ぶ、素より怪しむに足らざる也。然れども眞に文藝の甘さ香に酔ひ、深刻に人生を味はんとする者にありては、

此の如きは見識のみ、皮相的觀察のみ。「不如歸」は未だ許すに傑作を以てすべからざる也。まこと乃意義より見るも、小説として未だ及むざるもの多し。

あゝ論者よ、妄りに健全を叫ぶ勿れ。吾人は皮相を揣摩せるのみなる觀察によりて、まこと人生を知る能るざるを奈何せん。「不如歸」は佳作也、少くとも一新生面を拓きある佳什なりや雖も、文學的作物として猶ほ甚だ重要な地歩を占むべからざる也。

文藝漫評 怨月

高山博士を吊して思想問題に論及す

(上)

今より二十年前、文學士半峯居士（今の法學博士高田早苗）が批評文を卷尾に添へし文學士春のや主人（今の文學博士坪内雄藏）作、一讀三嘆當世書生氣貫の一編、漸く明治文學の曙光を放ち、爾來紅露柳鏡の諸家相次で其豊富なる詩才を揮ひ、荒蕪瘴味の我文壇も次第に百華爛熳の盛觀に赴きしと雖も、評論壇に至て

は道鴨二家を除くの外、又無人の境たりし也。文學博士高山林次郎氏は此時に出て、其天賦の才と深遠なる學識とを以て克く作家を指導し、讀者を啓發し文學美術、哲學、宗教界に貢賦せし偉大なる功蹟は、誠に明治文學史上に特筆大書せざるべき也。

氏頃者肺を患ひ、外國留學の思命も之が爲に辭し、帝國大學の講師も之が爲に辭し、靜養に専なりしと雖も天此才人に幸ひせき、終に明治三十五年十二月二十四日午後一時、平塚の香雲堂病院に暮れ行く歳と共に空しく白玉樓中乃人となんぬ。

噫、博學先覺の文藝批評家は、前途有爲の身を以て三十有二の壯齡にして逝きぬ。渾沌たる我思想界は長に一明星を失ひぬ。惜むべきかな、悼む可き哉。

吾人樗牛博士と一面の識ある者に非ざると雖も、其文に接するは博士が大學時代、讀賣新聞の懸賞小説として現れし瀧口入道以來や。當時吾人幼稚唯面白く一讀せしのみなりき。後聊文藝を嗜むに至り雜誌太陽は博士が雄渾富麗筆端の赴く所、人をして快哉の感あらしむる底の才筆を以てせし縦横は言議、文藝評論あるが爲に購讀せられき。斯て博士と敬慕するの念愈く深く、猶ほ未見の師をせりき。殊に客歲美的生活論の發

表せらるゝや、讀下一番、久しく我心に蟠りし懷疑の雲の昇る旭日に四散するが如く、痛快禁する能はざるものあり。吾人が此無意義なる人生に希望の光明を與ふる大導師、此人を措て他に求むべからざるを感せしめき。然るに今や亡焉。……此に悲哀の涙を拂ひて恭しく博士が英魂を吊ひ、美的生活論に基きて思想問題を論ぜるも、誰か贅辭を弄すと云ふや。

(下)

人は何が爲に生れ何が故に死すや。靈魂は肉体を離れて不滅なる歟。宇宙萬有は何者の創造なる乎。認識と實在との關係は如何。如是の問題を對しては上下四千年、希臘に於てはタレース、アナクシマン드로ス、印度に於ては佛典に所謂九十五種の外道以來、古往今來の哲學者、科學者、宗教者垣河砂數と雖を終に何等の説明をも與へざるゝ非せや。其偶解釋を盡せりと揚言する者も、畢竟は自己の獨斷に過ぎざるのみ、實や哲學は如何に高遠幽玄に、科學は如何に精到微妙の境に達するも、萬有の真相宇宙の實體は長に不可知、不可解、不可思議にして人間の智識慾は永久に満足せらるゝの期無けむ也。潛思ふ人は客觀萬有を怪むに先

ち、まづ我自身乃存在に對して更に甚だ多く疑はざる可らざるに非せや。

如上の事實に由れば、此自然人生は誠に無意義極る物にして、些れ光明なく希望なき疑問の積聚也と斷せざるべからず。然りと雖も既に現世に生出されたる以上は悔ゆるも甲斐なし。さりとしてまた哲學的煩悶の結果世を慕なきて、銀河九天より落つてふ華嚴の瀧に投じあるは猛火炎々たる淺間山頂の噴火口に身を隔らすべく、吾人の本能性は餘りに臆病に過ぐ。此に於て吾人は唯自然性に従ふあるを知るのみ。不可抗力の大自然に服する一途あるのみ。自然を讚美する者は福ひせられ、自然を咀ふ者は禍ひせらるべき也。

然るに世に道學先生、倫理學者なる者あり。彼等は道德なるものを以て恰も山の麓ゆるが如く、川の流るゝが如く、花の咲くが如く、鳥の歌ふが如く自然に客觀的に存在するものゝ如く思惟し、之に附與するに全權力と萬能力とを以てし、一切人間の行爲を束縛し、制限し、奴隸せしめむを己まざらんとす。而て其主とする所は、吾人が生れながらにして有する自然的本能性の發現を嚴禁し、以て善也と云ひ、正義也と稱す。吁、彼等は人乃造りたるものを以て天の造りたる物を

律せむとする也。人生をして戀愛な久、藝術な久活氣なき枯淡乾燥無趣味なる木偶の集會たらしめむとする也。吾人は何の宿罪ありて彼等が云爲に倣はざるべからざる乎。

惟ふに君子は身を殺して仁をなすと云ひ、男女七歳にして席を同らせすと云ひ、或は人汝が右頬を打たば又左頬をも轉じて之を向けよ、汝等の敵を愛し、呪ふ者を祝し、惡む者を善視し、虐遇迫害する者の爲に祈禱せよといひ、又は酒肉を禁じ、女犯を戒むる等、凡て自己の爲すべき事を爲さずして人の爲に爲す底の、個人の價値を蔑視し、禁慾を強ゆる反自然の舊道徳は吾人の甘んじて服従する能はざる所にして、復た決して人生の幸福を爲すものに非る也。今後起るべき新道徳は、必ずや個性の偉大なる自由發展を尚び、本能的人情を基礎とし、人生の眞の幸福を謀る自然的道徳ならざる可らざる也。

西鶴文粹と近世繪畫史

の二書は近來の好著也。西鶴文粹は露紅二家の同輯にして、上巻收むる所好色一代男、胸算用、中巻收むる所好色一代女、二代男、日本永代藏、武家義理物語、木町二十不孝、櫻陰比事、諸國はなし等也。原文の假

名には的確動すべからざる漢字を當てはめ、句讀点は最も精密に施されぬれを由來難解と稱せられし彼が文章も、少し久心を用ゆれを容易に讀解するを得べし。編輯二氏の勞實に多とすべき也。又博文館に前例あるにも闕せき禁止を賭して發行せる春陽堂が、勇氣と文學に忠なるとは深く謝する所也。

◎問屋の寛濶女 はやり小判は千種百品染 大晦日の振手形如件

(前略)近年銀なしの商人共。手前お金銀あるときは利無しに兩替屋へ預け。又入る時は借る爲にして小賢しきもの振手形といふ事を仕出して。手廻して互に好き事なり。此亭主も其心得にして。霜月乃末より銀貳拾五貫目。念比なる兩替屋へ預け置き。大拂の時。米屋を呉服屋も味噌屋も。紙屋も肴屋も。觀音講の出し前も揚屋れ銀も。乞ひに来るほどの者に其兩替屋で請け取れど。振手形一枚づ、渡して萬仕廻ふたどて。年籠りの住吉參。胸には波の立たぬ間もなし。みんな人の初穂は。受け給ふてから氣づか

び仕たまふべし。されど其振手形は貳拾五貫目に八十貫あまりの手形持かくる程に。兩替屋には算用指引して後に渡さう振手形大分有りとさまじく詮議するうちに。又掛乞も其手形を先へ渡し。又先から先へ渡し。後にはどさくさ入りみだれ。埒の明かぬ振手形を銀の替りに握りて年を取りける。一夜明くれば豊かなる春とぞ成りける。胸算用！
世人徒に銀行の預金小切手を以て明治の産物ごなす勿れ。元祿乃昔既に銀行あり、小切手の發明ありしを知らずや。

◎昔は掛算今は當座銀 江戸に隠なき出見世(前零)三井九郎右衛門といふ男。手金の光むかし小判の駿河町を云ふ所に。面九間に四十間に棟高く長屋づくりして。新棚を出し萬現銀賣と掛直なしと相定め。四十餘人利發手代を追まはし。一人一色の役目。たゞへ金襴類一人。白野郡内絹類一人。羽二重一人。紗綾類一人。紅類一人。麻袴類一人。毛織類一人。此如く手分をして。天鷲絨一寸四方。緞子毛拔袋になる程。緋縞子籠印だけ。龍門乃袖覆輪かたくくにも。物の自由に賣渡しぬ。殊更俄目見の

鬘斗目。いそぎの羽織などは。其使をまゑせ數十人の手前細工人立なぐび。即座に仕立てこれを渡しぬさによつて家榮え。毎日金子百五十兩づゝなりしに商賣しけるとなり。世の重寶是ぞかし。此亭主を見るに。目鼻立手足あつて外の人にかはつた所もなく家職にかはつてかこし。大商人の手本なるべし。
日本永代藏！
有名なる三井呉服店、にして當時一ヶ年の商金高五万四千兩に過ぎざりし也。

近世繪畫史は文學士藤岡作太郎氏の著す所、四百頁の大冊也。筆を土佐狩野に起し、第一期狩野全盛に於て探幽を述べて寛永頃の京都諸家に及び、第二期横流下行に於て畫界の天才、尾形光琳と叙して長崎と黄檗に及び、第三期舊風革新に於て大雅、應舉等を述べ、第四期諸派角逐に於て吳春と岸駒、文晁と抱一等を叙して維新以前の西洋畫に及び、第五期内外融화에於て現代の盛運に叙及し、以て局を結ぶ。本書の記する所は彼の徒に畫師の傳記を連ぬる畫人傳等とは全く其類を異にぞ、畫家の小傳、畫風の傳統を詳論し、並に傑作の寫眞を掲げて忌憚なく其巧拙を是非甲乙し、又文學

及び時代國民の思想風俗を對照併記して、美術は國民が時代精神の發現なるを明にせし等、最も著者の用意周到なるを覺ゆ。
本書近世の名を冠すと雖も、恰も文學に於て西鶴以前見るべきもの少なきが如く繪畫に於ても土佐狩野以前見るべき作品なきを以て、日本繪畫史を稱するも敢て不當に非る也。兎に角吾人は本書を空前の好著と賞賛し、世に推奨するを憚らざる也。

無題錄 三則

◎志を立て理想を抱きては獨立自信、世に處し人と交りては獨立自尊、職業に従ひ事務を執るに當りては獨立自營。如斯人は吾人之を尊み、之を愛す。
◎個人は國家に服従せざるべからず。吾人常に國際間の現狀に鑑み、國家の利益即國民の満足なるべきを信ず。近久は露國キシネフに於ける、亡國の民猶太人虐殺事件に見よ。
◎當時佛敎界唯一高德の僧と稱せらるゝ釋雲照律師は盛に四恩十善其他諸の戒律を説きて、佛敎の精隨根本主義此に盡されたりと云ふ。借問す律師よ、他日科學研究の發達に伴ひ、植物も亦生物にして他の動物の食用に供せらるゝを厭ふ意志を有する事發見せられぬ

華嚴瀑

藤村操氏を吊ふ歌 きんせむ

六十丈の懸泉天涯より落つ
白沫萬古乃恨を含んで靡々
狂魂を天に吐き白屍を埋葬し去り
滔々として願思せず大谷の水。
落日の影、惆悵の姿
悄然巖頭に立つて溪流を望めむ
氷烟模糊として天地不可解
日は落ち星は失せ月末だ昇らず。
悠なる哉天地遼なる哉古今
年は無恨に起り又無限に去る
五尺の神軀唯だ塵のみ

歡聲一發天地響なし。

萬有の真相や永えに暗闇

憶ふて不可解行きて不得求

大空果しなし砂漠の旅

飢えて勞れて煩悶に死せむ。

冷なる哉天や朽なる哉地や

冥暗に生れ又冥暗に消ゆ

人生何者ぞ何を解しての働く

誰か此の苦に處し永劫生さんとすらむ。

巖壁の大樹を白うして書き遺く

渦中途に望む道迷の路

胸中既に死有り生塵の如し

大悲は吾を蹴て大樂に埋む

一躍身を跳なして瀑下に投せむ

生死の別離や夫れこの刻

天帝の泪頬を傳ふて數行

面々噫！輝く悲憤の色。

咄何のさかしらぞ敢て死を擅ふす

歸れ々々々吾が友

右手に宗教の燈をのさして探れ

宇宙の神秘何の難ぞ。

暗夜孤影地を蹴て翔り

暗黒の大野に眞珠を探る者よ

飄々雲に浮びて行き風を得て奔れど

唯暗は寒し五里霧中。

大瀑落ちて六十丈

天を蹴り地を咽んで流る

怨みは深し華嚴の瀧

永劫に記せむ晩春の恨。

白は恨を吐き碧は怨を埋む

行いて問はん乎水去りて不歸

百雷天才を碎いて顧みず

溶々流れ去る大谷乃水。

(おはり)

微吟悠々

紫石生

笛ふく男

荒ぶる神の怒やはらぎ

今は名残りの野末よ遠く

ひらたく青くよはさ光

小羊去りし牧場にかそか

黒き木立に調べは冴えて

神代ながらの笛の音來る

乙女も眉を纏むるをかり

川べり清き蘆葉のなかに

白き花わけすさぶ風流男

落つる星の眸にふれて

うなづる調べとはに絶えつ

なぞの鼓動のあゝ堪えんや

螢

梅、桃、櫻はやゆきて

四方の青葉の夏木立

變らざるもの小川かも

四つ六つ八つの袂もて

吹く川風に螢追ふ

新

涼

浮城會

光とぐれし其ひびつ
飛び行きし光妹が庭

(完)

雞鳴に關を出けり天の川

奇北

蜻蛉や花檀を限る四ツ目垣

同

朝霧や雞出て遊ぶ野の小家

同

萩植ゆる王子の崖や家構へ

同

刈萱は愚なるが如く秋近し

同

畦乃榛の枝切りこのす残暑哉

同

秋近し豆畑黄なる麓村

黄濤

無花果の落つる瘦地や秋近し

同

瓦子す瓦屋もある残暑かな

同

隣から柿あるくど初嵐

同

雁鳴くや柩を送る村の人

同春圃

萩の花隣に琵琶の法師住む

同

霧晴れて山畑蕎麥乃花白し

同

山霧の巖に迫り水駛さ

同

雁渡る出水の村の月夜かな

同

穂に出づる庭れ芒や初嵐

同

て波有るをほゞく知り得しばかりなり。眺め近きと
みろにて既にか久の如し。遠き所はいふまでもなく、
波といふ波有りとしも見えす。

一面の明鏡を拭ひしが如しと、漢土の人をた、えけ
ん、その言葉はまゝとにわれを欺のさうきと、今さら
の如くつくづくと思ひなされつ、。あわれ大洋になき
眺め、江海に望むべくもあらぬ姿を、今は始めておの
湖にのぞみて知りつ、

暮れ行く日ぞいと怨めしけれども、われに平相國が
同陽の扇あるにあらす。借しや／＼と言ふべかりにて
われも遂にはしか暮る、日を、佐用姫とかなじさまに
て見送るのみの身となりぬ。

六

あ、動ける自然の名畫！
變幻の美を弄せる化工の大作！！
あだし褒めおせばは加へんとして扱得ず。(完)

春の一日

山田 怨月

(上) 桃 林

四月三日朝、川島奇北の勤めに従ひ、館林の桃見むと
出で立つ。腕車を驅りて奇北宅に赴き、子の友人笠子
も共に行く。徒歩なり。

島間の細徑を迂曲すること數百武、利根河堤に達し、
川俣架橋合資會社架する所の舟橋を渡る。恰も好し町
外れに乗合馬車の客を待つあり、即ち其便に依りて館
林在松原村に着きぬ。

眼も遙なる一帯の麥圃は盡く桃林にして、當に七分の
開蕾を告げ上下紅緑相映して更に一段の美觀を極む。

賞花嘆美消遙數時、なほ紅霞丹雲の裡を行き、五六町
にして躑躅岡公園に達す。碑あり『躑躅は新田左中將
の夫人勾當内侍の植うる所、降りては世々館林城主の
遊園たり。近年荒廢に歸せるを當地の有志者之を慨き
、資を募りて園を再興し、明治某年時の顯官縣吏を招
きて盛に開園の式を行ふ。惟ふに此舉を、當に名園を
復興して人目を樂しむるのみに止らず、爾後此に遊ぶ
者必ず元弘、建武の昔を追懷して中興の業を忍び、左
中將が忠烈を憶はずんを非す。されば國民道徳に資す
る所、亦偉也と云ふべし。』との意を記せり。池に片碑
二あり。曰く。

しはらくは花の色なる月夜かな 芭蕉

扇透く空やつしの三四月 眞路

今朝とり曇りし空は終に無情の雨を降らしぬ。避けて
門外の茶店に憩ふ。

此日神武天皇祭なるにも係らき、他にまた一人も賞桃
の客を見ず。思ふに此地の人其美を解せず、他境の者
は躑躅の盛名に眩して桃の勝を知らざるに由るか。花
若有靈亦將泣。

(中) 茂 林 寺

漸く雨止み天晴れ初めけれ茂林寺を指して進む。雜
木林の間道を七八町過ぎて仁王門に達す。建築甚だ古
く雅致愛すべきものありと雖も、朱漆皆剝落し蜜連金
剛、那羅延金剛二夜及は何地に去けむ更に痕跡を留め
ず。鐘樓失せけれをにや、代りに梵鐘の懸れる最と哀
なり。『青龍山』の篇額あり。

門を入れを左に露佛あり、正面は本堂にして右は庫裡
なり。殿宇壯嚴、流石に名刹たるに耻ぢず。庫裡に至
り案内を乞へを、少時して應と答へ老僧一人出で來り
つ。即ち寶物を觀覽したき旨を告ぐれば先づ客室を請
じ、茶菓を供して後寶物室に誘ふ。
恭しく床に安置せるは有名なる紫金銅分福茶釜なり。

(下) 川俣の夕照

川俣の堤下に『青龍樓』となん呼べる料理兼旅店あり。
往昔は此地娼家軒を連ね、美妓遊君利根の河水に粧ひ
を凝らし、朝に羈旅の客を送りて後朝の別れ、戀々の

古色蒼然、一見其舊物たるを知るべし。形狀頗る奇に
して之を叩けば妙音を發す。周圍四尺、口の直徑八寸
容水一斗二升五合と稱す。熟視注目するも毫も怪異あ
るなし。靈釜今猶ほ無盡藏の驗術ありやなしや。

舜舉の牡丹畫、全面黒きみて彩色を辨する能はず。徳
川綱吉之を一花千金と賞へしやかや、予は一花一金に
だも價せせと云はむ。若夫楓林停車に至ては用筆活達
誠に逸品と稱すべし。『吳那唐寅』の落款あり。

羅漢 禪月。血書羅漢 得宗子。

金王金沙 周閑。壽老人 周文。

達磨 美之。觀音 牧溪。

十一面觀音 思恭。支那西湖圖 不詳。

後陽成天皇御繪旨。後柏原天皇勅願寺御繪旨。

大日本赤十字社總裁大勳位彰仁親王之書。

右の外古渡り端溪之銘硯、青龍領下之珠等あり。親王

の御筆は『萬邦皆有喜一氣素無私』とあり。觀覽料二十

五錢を投じて歸途に就きぬ。

宵の歩み

三四

不秋生

情綿々乃想、永く盡くる期なからしめ、夕に野面歸りの泥脛洗ひも果てぬ近郷の若殿原を迎へて、粒々辛苦乃膏血を絞りし狭斜の巷にして青松樓も其一なりしが盛者必衰の例しに漏れず、群馬縣廢娼せ嚴令は暴風の如く玉屋花街を吹き交りて、長に紅燈絃歌を奪ひてより曩日の繁榮また見るを得ずとのや。奇北の物語りなり。

舟橋に至れ心H正に春さ、夕燒の雲は金色に紅に紫に上信の連山は翠巒拭ふが如く、遠近の船帆また暮陽に映じて銀輝を放つ。名にし負ふ坂東太郎が滔々溶々たる千波万波は燃ゆるが如き落暉の赫燦たる閃耀を浮べて、或は一條の金龍水面を走り、浪に碎けては唯是れ滿河千條の光明のせむかり。雄渾の麗闊大の美、絶景筆すべからざり可からざるあり。皆暫は自然の壯美に打たれぬ。潛に思へらく、予や未だ八景の佳に接せずと雖も、恐らくは瀬田の夕照も此眼前の景色には過ぎざらむ。

奇北、笠子に告別し伸を家路に馳すれば、舊曆六日の月高く額上に在りて、朧に車影を後に印せり。



ていつた。

僕は二三日前に、片足に微傷をしたので、引きずりながら徐々と歩いた、後から来た人は僕より先へゆき目の前にあつた人が早やすと向ふへ歩みつゝ行くので僕は自分ながら遅々として、はかどらぬのに驚いた、二丁目をかりの中に氷屋を四五間過ぎた、飲んで居る人は一間に大底三三人だの中に一人も入つて居ない店を一軒見た、床臺は赤ケツトを敷きつめて、車の屋形の上には金時やら氷美哉などの提灯が、かゝげてある。此一町内は南側總べてせも云つては、くらゐ、陶器屋がある、茶碗、小皿、など一盃に店の棚に並べてある、西行だの、橋、燈明など築山の裝飾品もあつた。髻の人、束髪の人。子を抱く人など余念もなく、店頭に立つて品評をしたり、價を聞いたりして居る。

僕は北側の方へ歩を轉じた、中林商舗を書いた門の前一本の電柱がある、其下にしきりと憐を乞ふて居る少女があつた、通りかゝつた十四五の少女、手をのべて何かを與へて去つた、彼方はまゝしきりに禮のべて頭を地につけて喜ぶのであつた、感心な少女だ、それから二三間も東へもくと大阪毎日新聞の支局があるその前に饅頭の店が出て居て、少しはなれた東に百合

廣小路へ出た。
丁度電鉄が西から来たところで、チン／＼と鈴をならして居る。

『御園の方はかりて下さる／＼』
との車掌の注意で、せや／＼と下りて来る老幼男女今しも八時流車に乗つて来たお客だろ、各手に手荷物を提げて居る、電鉄は再び運轉して東へゆきかけた後から追つかけて走る人もあつた。

途の両側には葉柳が立ち並んで西、笹島停車場から東、千種停車場までを貫いて居る。

其葉柳の下には氷屋などの紅提灯やら、植木屋のカンテラなどが、そまゝにちらばつて本町の角の大電燈の際で一層甚しく密接し、丁度提灯を以てかためたかの如くである、なか／＼に奇観だ。

僕は今南側を通つてゆくのである、耳邊を掠めてゆく風は涼しく葉柳にまたつて、商家の軒に吊るすローの提灯やら、中間をしきる羅の暖簾などをふん

を澤山に賣つて居る爺と若者があつた

三十近い、デツブリ肥えた一人の紳士らしきものが立ち止めて、それれれとなく眺めて居た。

『旦那、一つ召して下さい』

爺は煙管をくわへつゝ、眺めて居る紳士に云つた。
紳士は四本ばかり一所にく／＼りつけたのをとつた。

『おい、おれや幾程なんだ』

若者れ方へ向つて問つた、若者は剃つたばかりのく／＼坊主を、右の手で一なでしゑ。

『へい四錢五厘でございます』

『ふん、四錢五厘だア、一本の價うナ』

鼻であしらふ様にして云つた、若者はまたも頭をになでした。

『へい、一本の價でございますが……』

後は云はせも敢へず紳士は、

『お負け申しますかナ、安いなを』

中心冷笑して、ワザトらしく名古屋訛を洒落た、若者も爺も「へへ……」と笑つたきり黙して居た、買ふのでなくて冷かしの來たのだと思つたらしい。其時やわらかい風が一ふきしたのでカンテラの油煙が、はげしく立ちのぼつて紳士の顔のあたりに來た。

れて居る所から丁度丘の上部を飽丁で切つたかと思はれる様に一直線の堤が見えた、堤だ堤だ利根の堤！とは異口同音、次郎は早や塲所を撰んで寫生を始めた書し終つて共に行くに數丁で堤についた、勇んで堤を走り上つたら遽に眼界ひらけてまばゆきまかり渺茫たる利根川は潺湲と流れて居るのである、浩々、滔々、澗々、嗚呼坂東太郎!!!何ぞそれ悠なる

前岸は綠色こき夏草をいただいて土が波に洗はれて居る、其上には群馬の堤が流れて居る、又其上には遠く日光山脈の余派が走つて來て居る、日和とき故にや近くは淺水蘆花の邊より帆を打張つて水烟を立て、漕ぎ出す舟が二三遠くは真帆片帆の漂ふてるのが見える、肝武藏野の平野を此河があれを其凡々たるを恕すべしである、

眺望數刻後携ふる所のむすびをまだ正午には大分時はあつたが一つづつやつつけた、

そこで太郎好奇心に驅られて次郎の寫生道具を借り上流及び下流に向つて一葉づつ二葉を寫生したが次郎のそれには比べものにはならない、

それから堤を下流に沿ふて行くと突出せる岸があつて水流が棒杭と此岸角に激して泡を飛ぶすのがいと面白

く幸ひ芝生の如き所があつたから腰打のけ泡角を眺め乍ら殘らぬむすびを平けた

ゆき腹も出來たから今度は洗足になり尻をはしをけて砂原を涉り淺瀬を越え何とやら云ふ白鳥を遣ひ馳けなぞして終に見沼用水の樋のある少し手前で足を洗つた、

顧みればお、迄隨分歩いたと思つた砂原を遠からず、点々指す事が出来る、それより流に隨つて堤を下り行くに其處に一匹の牛がなぐられて居つたが青いところ赤牛、大に美感を呈した、鼻にかけられたる綱もいと長くお、あたりに我領地なりと云はんす顔して道を遮つて居る、君子は危に近寄らずとの口吻を籍りて大人ぶつて堤の半程まで下り之をよけて通つた、されど牛公一向平氣なもので空嘯つて居つた、猶行く事一町許森々たる丘林へ來た、丘の上にもふりたる編小な社が朽傾いてあつた、詣る人も稀なのであるうか通する路は草生ひ茂り蝮蛇の所得顔にこゝを横切つてうらさびしく松の響木深々聞えなんぞして哀れに物思ひつづける、のであるふと傍を見れば陸軍陸地測量部の測量臺があつて其處に此臺に登らむ法律にて處分すとの標札が懸つて居つた、折角我物と思つた此境も

はしなくこんな文句で興さまされた、

そまを出て行くよと二丁バのり森林ある松林へ來た、次郎は善き塲所でも見出したのであらう寫生するかととて河岸へ行つた、余と三郎は共にその林へ分け入り足の疲れを休めんものを暫しが程寝よるんだ、古松森々日光を遮り加之涼風徐に樹間を渡るのであるから忽ち汗は消え去りそがくしくなつた、頭の上では蟬がザザ〜實にやかましいが又何んぞなく勞を慰める様でもあつた、忽ち寝よるんで居つた三郎が飛起きて走り出したが何をすると云はせも果ては忽ち戻つて來た、見れむ手の中でザザ〜やかましく鳴いて居るものがあつた、あ〜蟬々、併しあまり喧しく鳴くので放ちやつたら喜むしげに飛び去つて仕舞つた、しむらくはみ疲を慰めた後二郎の所へ行つたがまだ余念なく寫生して居つた、寫し終るを待つて歸途についた、こゝは何處ぞとそよらの農夫に問ふたら須加村と答へた、來し方に戻つて見沼用水の樋まで來り次郎は茲に又二葉ばかり寫生して此自然を己がスケッチのものとしたりおれより道を此見沼用水に沿ふて取り道もろく〜得知らね人々を尋ね行く〜今日の愉快を語りなんぞして齋條、白河戸を経て長野に入りそれより中堀とな

むいふめる細き流れに沿ふて田圃を掃斷り蓮華寺を抜けて親しきホームに着きしは早暮色蒼然たる頃であつた、

物はすべて見様考へ様で面白くも悲しくもつまらなくも何とでもなるものである、余の見様考へ様では實に此小旅行は面白くも愉快にもあり又見るべき所も趣味もあつたと思ふが、諸君の見様考へ様は果して如何

春のぶ草

すみれ

春をやう〜深くなりて、梢の花の色香も妙なる頃、妻は友と二人野邊の美しき藪の床に横はりて、暖き春の光を樂みつゝ、心ゆくばかりオルズオルスを歌ひしが、『一夜の嵐にあはれ美はしかりしその儂も、今はたいつくにか尋ねべき。落花空しく地に委して、あはれ艶なるみ姿のそれも幻のや。

あゝ黃鳥老い易く、桃花常にうつろひぬ。悲しからずや人の世、脆きは人の運命なる哉。つれ〜なる春雨の小窓によりて、座ろに調ぶる琴

比十三弦、糸のをつれかや、乱れたる一節、怪しうもわが友花子の君の面影ありとよまれつ。幸うすかりしかの君が、いまはの玉章、糸より細き春雨のそぼふる庭に青柳の緑り出す翠のそれならで、心細き胸痛ましむる斷腸の想ひを讀みてんや。

一筆申納候、此の文の御手に披かれ候はむ時よ、妾ははや浮世を空蟬の西へと急ぐ身にて候べし。いとしきわが友よ。御身と分れ參らせてより、早や三たび衣をかへて候、長閑なる春のなよ風に櫻の花の咲き充ちて都大路は櫻かざし、雅人のあまがれありくもさはにて候はん。君にはいよ、御健のに今は學び舎に教への鞭をとらせ玉ふや。願うらくは神の恵みのみや榮えに榮わませ。さるよても幸なく光なき妾の身の果敢なきよ。菅の根の永き春の日も、爛熳の花のながめも、妾にとりては今は何ゆ嬉しからせ候。妾は今夫が故里なる此の淋しき△△と申す片山里に、病を養ふ身にて候へども今ははや明日をも知れぬ露の命の、いと頼みがた久候ま、過ぐる夏君に文せしよの方筆とる事も懶久候ものあら、今は中々に言はで止むおどの口惜し久苦しき息の下より申殘し參らせ候、思へ三年の前△國に遊ぶ身となりてより夫が仕うまつる公け事のひま

にはかの國人との交りも中々に忙し久、學びの窓にて習ひ覚えしとつ國の言葉もいつしる物の用に立ちて、出で、は白銀の燭光まをり某の夜會に、此の世からなる天國と觀じ、入りては縁滴る庭の面にわが夫とピアノを奏で、戀しき思ひを古里の海山よ寄せ、樂し久も亦樂しかりし月日を送るにつけても、神の恵みのみや高くみや深さをそゝるに謝し參らせしが、今は徒らに思ひの種やなりて胸痛み候。知ろし召さるゝ如く妾はいと健かなる性にて候ひしが去年卯の月の交身重となりてよりは心常に清々しからず、金を磔かさん苦熱のいと、身にしみて堪え難く身内も頼に瘦せ衰へ、秋風立ち初めて藥ふる夜もありとはいへど病葉のひらり／＼と落つる音も耳にけた／＼とましう覺え候ひしが、其頃より夢うつゝの身となりて、いとしき夫の言の葉もいと幽かに響きて、風にも得堪えで散る柳葉の身の空蟬の果ぞと覺え候ひしが、その後此里に母上の情の下に心安う今年の春を迎へ、睦月の末つ方男の子を生み落して愁の眉を開きしそれもあだなれ、ほどなく再び病の瘳につきて春は三月、彌生の花も散り悉さんけふ此ごろ、人としては此の世の務了へぬ此身の吐血數度、くすしはさりけなう氣管のわづらいとらみ申

せ、妾ははや病の根ふかく骨を蝕み、おどの身に返らん望を絶えたりとある存候へ。夫は天外萬里の客、入重の沙路の遙うにて夢うつゝなる生別れに、此の世にて再び會ひまゆらん日とも候はず。今はただ神のみ手に絶りて安らげき眠りにつかんとのみ、又何をう怨み申すべき。よし暫しなりとも樂しがりしわが榮を謝しまつらむ。ただ願はしきは妾が幼な兒のおと、幸ひに君の愛子とおぼして老先ながき君の手鹽にかけ玉ひてんや。おれこそわが夫へのせめてもの志しにて候ふべし。いまわの際に戀しき夫に遺せし一封と共に此の世に二なさわが友におもひのあまり、にぢみたる水莖の埒なき線言書き残さまはしうてかくなん。さらばいとしの友と、名残かしき君よ、とはに幸くまします。

卯月八日

深山の里より

花子

都なる

すみれの君まゐる

(をほり)

作者は「ものうら」の意義を誤り解せられたる者の如し。「ものから」は「故」にあらせ、「ものながら」の畧なり、今削りたれを原文「君はピアノに秀で玉ひ妾

は琴を好めるもの、ら、日々、合奏に餘念なく」とありまれ明かに誤用也。この場合「から」は下句の一轉を示す。作者の注意を乞ふ所以也。
原文冗長、ただまゝ擲すべき詩味あり。前途多望の筆路、作者愛惜して可也。
(薇山)

益山尺水

溶々たる大江の流、巍峩たる大嶽乃景、もどもりわれらが翫賞に價せせんばあらず。然れども掌大の天地、寸山尺水の眺め、また必らずしも劣れりとはいふべからじ。潺湲たる小川、庭苑裡の築山、そこに自ら愛すべきある者の潜在するものなからんや。文短きが故に未だ必ずしも劣等なりといふの理なし『益山尺水』豈讀者が一察に足らずとせんや。(記者)

晚秋

芙蓉生

秋風いと、身にしみて後庭の梧桐の影も淋しく草葉にすだく虫の聲さへ夜毎に弱り行くめり。
月影寒く霜置き渡せる大地や淋しげに招く尾花や葉末

に宿る白露やいづれか哀れならぬはなき秋の夜の野邊を唯獨りさまよへ空飛ぶ一行の雁乃地に影を印し何行くに不圖打ち仰ぐ大空は高く澄み亘り明俊々たる玉兔の光冴えて半輪の雲もなし。

心にあゝる隈な久心をすみわたれる折しも何處の誰が手すさびを遠砧の音高く或は低く……

われ座ろに秋思に得堪えでいつか夢幻の境に入りぬ。月やうく傾久につれて今は打つ手もたゆみけん虫の音と共に絶えては續き續きては又絶えつ。古人の歌ひけむ『かりくは眠る音さく砧哉』とはこれにや。

友にや後れけむ一聲高く鳴き渡る孤雁あり汗『秋の夜を物思ふことの限りなりける』とは聞き何れぞかくも人乃腸を断つべしとはかけても思ひさや。

更け行く夜風乃冷かに面を掠むるにわれは夢幻れ世界より呼び覺まされつ又もや塵乃世れ人となりぬ望みある筆也。たゞ晩秋れ景物未だ描いて悉せりとはずべからじ。あるひは文の短きにもよらん乎薇山

進取の氣象無かるべからず

霽州生

吾人進取の氣象なありせば、則ち潜水の腐敗するが如

く萬事休止せん。進取の氣象は即ち向上心なり。此心存せば低きにありて高きを忘れず、逆境に在て順境を遺すれず。希望活氣快樂常に胸に充ちて溢れん。斯くて萬一にも希望を果たす能はざるおとありとするも、快自ら其中にあり。進取の氣なくを、則ち退隱主義を把り、企業揚がらず。人智伸びず遂に寂莫荒涼なる社會を爲すべし。眼を古今東西に放て觀察せよ、源右府頼朝、楠正成にして此氣をかりしならん、數度の敗に意氣沮喪し、終には功成らずして碌々黄泉の客となりしならん。豊太閤にして東照公にしてもし此氣旺ならざりしならんには英名を後昆に垂るを得ざりしならん又彼の一青年にして半生已に歐洲大陸を風靡したるナポレオン、北米合衆國をして、國民舉て英國に反旗を翻し遂に獨立の目的を達せしめ、ジョージワシントン又高名なるピスマー、グラント……其人等の進取は太陽の光線と同じく其突進を妨ぐる能はずと歌はれし二人の如き、近久は故大統領マツキンレー等の如き向上心即ち進取の氣勿かりしならん、或は一軍人として或は一匹夫として果た又無名の一會社員等として、永えに芳名を博し得ざりしならん。一たび志を得て勇猛直進其事業に盡瘁せしにより、彼等が如き大名嚇嚇た

平凡の論也、而して一面の眞理はあれあり。文なは平板切に奮勵を祈る。(薇山)

成 功

霽州生

るを得しなり。以上乃輩此點は於ては吾人取て以て軌範となすに足る。進取の氣象に之を養はせしめて可ならんや。さは云へ進取あると共に現在の地位を忘るべからず。徒に空想にのみ驅られて刻下の事業を忽にするが如きは斷じて不可なり。自から勉強して實力を養はざるべからず、秩序を踏まざるべからず。千里の遠きも一歩よりすどかや。一躍成功を望み、己が境遇に不満不平不忠實なる如きは之れ亦不可なり。上に擧げたるの偉人傑士概ね天下大乱、干戈閃電、兵燹頻々たるの世一時の戰雲に乗じたるもの多し。平居無事にありて此れと同一轍の成功は難しとするも要するに進取の氣は成功の母なり。失望落膽意氣沮喪は失敗の子なり吾人能久其處を辯せざるべからず。

予文辭拙劣諸子の玉編錦繡と伍を同する素より玉石混淆なるべきを信じ慚懼措く能はずと雖も此目的たる筆尖の練磨によそわれ敢て雀燕を鳳雛中に挟む諸子の中には或は憶するものなりや投稿會員の數に充たざるも夥し希くは文の巧拙に論なく恐るゝなく批評添削を得て以て各自の研鑽に資せんことをよい哉君が志吾等は本會會員の凡てが君と同一なる行動の下に出でん事を希ふ(△△△)

近頃失敗者墮落者の頻々數を増す故であらうか。成功と言ふことが非常に口喧かやしく言ひ囃やされる。成功といふ事は何故そんなに困難事であらうか。成功といへを何でもなぬ。讀んで文字の通り功を成し遂げたらそれでよいので、何をそんなに囂々言ふ價値がないぢやないか。吾々學生で云つて見ら初等小學を卒業したのも一つの成功で、更に進んで高等小學を卒業したのを、或は中學を卒たのも一歩進んだ成功でそれか、高等學校乃至其他の高等なる學校へ入學しぬのも是亦一層の成功だらう。或は又大學でも出たら立派な成功ではなからうか。學生以外の者で言つたら赤貧者が漸く破落戸の域を脱して、宿車屋に這入り込んだのも或は更に曳子から親分株に成つたどのなどは豪い成功ではなからうか。然り以上述べた處を或は成功の一種かも知れぬ。こんなものが成功といへるなら何も成功といへば、議論のない單純なものである。が吾々

のいはゆる成功なるものは、そんなものをいふのであ
るまい。吾々が中學の課程を卒へて其れ以上の學校へ
入籍したらそら、成功の第一着歩かもしれなぬ。然し
ながら大學を卒業したからとて、高商の専攻科を出た
處で是等が、吾々の第一として望むものでないもので、
是等は成功の緒に着いたものであらう。それなら吾々
が望むのは如何いふものであらうかといへば、すなは
ち大成功、即ち思ふ處盡する處が、成し遂げられて、
芳名を千載の後に残しぬものである。そよ何でも
成功をいふといふので、世間には随分陋劣な手段
方法を執るものも往々あるやうである。例へば運動の
競走に他人を攘ひ退けて己れが先に進む如く、社會に
出てから此の様な妨害をして、或は他人を貶して見た
り、誹て見たりして、その進行を杜がうとするのがあ
るといふことである。是等は如何にもありさうなことだ
である。が如何に己れの成功を期すとも、他人をまで
妨げて自ら前進しやうといふは卑劣中の卑劣であらう
又他人の力に絶り倚て、手を把り足を持たれして恰も
纏繞莖の蔦か牽牛花の如くして花を咲き實を結ばうと
するものも多し。諸子も豫て御承知であらうが現今の大
學生(之に限るまいが之に最多であるとの事)の中には

學問を研究しやうといふのは第二で、寧ろ在校の維持
さへ出来れを佳いといふ考へで、稱號を楯に、佳い處
女の且つ資産ある家へ縁を求めやうとして齷齪して居
るものがあるやいふ。實に言語道斷、然しおれは今に
始まつた事ではなくて既に業に先輩が此の手で甘々稍々
成功の花を咲かせやうとして居るものがあつて、現に
大臣の椅子にまで上つた者のあるといふので、多分此
法で袖手一攫萬金濡手で粟といふ先生達なのであらう
がそれは僥倖中の僥倖で稀にか御目にふらさがるもの
ではない。又財産家に妙齡の處女があることを限るまい
。如斯精神で勉學する者が少數たりやもあつては我が
學界も思ひ遣られる。國家も終には危ういであらう。
此も即ち所謂陋劣の手段なのである。如此事で例令萬
一成功しても世間の侮蔑は甚だしいであらう。之を輕
侮せぬ様なら即ち澆季の世なのである。勿論郷友諸
子中には夢想にだも如斯者は萬一にもなぬが。世間には
往々あるとの事である。是等は即ち瞞着的政略で風
上にも置けぬ奴である。

又未熟者輩が、黃吻者が青二歳を省みず。速くもぶる
のがある。是輩は自稱成功者で到底大成功は難い、斯
いふのは早速鼻柱を折り挫いて事に勉めさせ眞面目の
成功をさせたいのである。そよ日本人に成功したの
も數多くあらうが。歐米には殊に大成功者があるとの
事。例へばワットの如き、エチンソンの如き。或は實
業家で云つて見たら方今有名な、電信技師のら身を起
して五億の富を藏すといふ、アンドルー、カーネギー
の如き或は俊才モルガンの如き或はセルローズの如
きは即ち賞するに足るであらう。カ氏の如きは單に俄
大盡でなく文學に於ても。趣味を有て居るらしい。即
ち著書が二三種見える。諸君御承知の通り日本は世界
的の日本帝國で成つた丈け夫れだけ諸設備も、富の度も
進めぬならぬのである。であるから現時の日本は實
用的活人物を要するので小才子は余り必要はない故に
諸子有用の材となられて新日本の體面を維持し得られ
る様にして戴きたいのである。今は暢氣な惰眠を恣に
して居られる秋でない、覺醒々々。了りに菴んで更に
言ふ。世に所謂成功なる者は則ち大成功を意味するも
のご解釋して戴きたい。

試みに問はむ所謂大成功とは何ぞ? 大といひ小とい

ふ要するに相對的名詞のみ。米國富豪某氏は四十歳
迄に二萬弗を積まんぬを冀ひて而も未だ不惑に至
らざして四十萬弗を贏ち得たる非非也。當時氏が
二萬弗は君が所謂大成功たりしや論なし。吾人が憂
ふる處は成功の大小にあらざ(そは無意味のみ)。た
だ此の流行の吾人青年に如何の感化を興ふるやにあ
りて存す。君が所論未だ透徹せりとすべからじ。別
項の拙作『成功熱を排す』といへる一文は或は君が一
顧を贏ち得ん乎。妄評多罪。
(薇山)

某溫泉に遊ぶ

稻垣方雄

炎威苛酷殆んど座すべからざ故に某溫泉に遊むんと親
友四五名と約し則行季を治め出發の途に就久行くおせ
數里にして某場に達す此地や深山幽靜閑雅にして人な
く鳥は樹間に囀り花開いて好景掬すべく悠然として塵
外に遊ぶの思ひほらしむ予等此に於て一旅亭に投じ浴
を試み茶菓を命じ共々詩歌を唱ひて樂む己にして致日
歸を促すの時達し愴愴家に歸り此記を作りて遺忘に備
ふ

題はいづか書き方が陳腐極る。も少し工夫はなぬか

知らむ。(薇山)

忍 耐

原田 俊郎

余聞く何事も忍耐にありと、真なる哉言や天性英才富貴なる人と雖放逸遊惰なれば一事一業も成就せずして空しく一生を終るべし、之に反して天性凡智貧困なる人と雖孜々勉強せば一大事業を成就して樂しく世を終る事を得べし、彼のワットを見よ十七年間屈せし擡まき忍耐の功を積み蒸氣機關を發明せしよあらざるや。彼も人なり我も人なり豈なざるの理あらんや。嗚呼日本帝國の相續者たる吾等青年は茲に鑑み忍耐以て艱難を凌ぎ一大偉業を成し芳名を萬國に放たせしむ可ならんや。

日 本 魂

羽山助右衛門

日本魂とは何ぞ、曰く砲雷天に轟き劍電眼を射天裂け地震動し山崩れ海嘯き煙霞日光を遮りて目眩し耳聾するも尚神色自若として動せざるを重んじ死を輕んじ進むを知りて退久を知らず粉骨碎身倒れて後止むの精神を云ふなり、日本魂嗚呼壯ならざるや。

幼 時 を 思 ふ

X 生

今から幼時を思ふを實に面白くことや悲しいまどが色々ある。お寺のやまへ整符に行つて肝を冷したり、水浴に行つて溺死せんとするのを助けられぬるまどをある。だが僕が今に成つてもたびたび思ひ浮ぶのは、十一歳の夏、父上母上と共に伊香保へ湯治に行つて居た

時である。其の宿屋より子供の來客は僕獨であるから、逗留して居る紳士紳商などに大に愛せられた。或日庭で遊ぶで居ると、僕を呼ぶものがあるからすぐ行くや。僕の氣に久はぬ東京乃老爺と、越後の紳商某と共に寫眞を寫すので、僕を無理に寫させた後に、其の寫眞を送らうと云うたが、僕は辞した。今と成つては其の時の面影が見たくて、今其の寫眞は何處に在るだらうといつも其時分のおどが思ひ出される。

善く働き善く遊ぶべき論

I S 生

我國人は善く働き又善く遊ぶと云ふ明瞭なる區別なくして二三日は熱心に或事業を勉むれども其後は一向怠りて數日を経るも働かざるもの比々然らざるはなし此等は即ち忍耐に乏しきものなり故に余は今此等の人々の爲めに英京ロンドンの人民の動作を記して彼と此とを比較し更に其差の甚しきを示し以て我國人が頂門の一針たらしめんとす

聞説彼の國人は日々業務に従事するに豫め時刻を定め置き其時至れば場にのぼりて持据勉勵又餘念なしかくて終業の時刻を報せられ猶豫するまどなく几を蓋ひ手

を洗ひ家に歸りて服を脱ぎ換へ或は車を馳せ馬に乗り或は園池に釣を垂れ河流に扁舟を浮べ或は雪を衝き球を擲ち或は花を觀鳥を聽き或は朋友を尋ね親戚を訪ひ後家に歸りて晚餐を喫するまど出入動止時刻の定むありて一屈一伸一弛一弛一張凡べて其よろしきに適せり尤も出入の時刻動止の寛嚴は社界の貴賤と職業の高卑とに依りて異なれり彼の工場に出で、日々賃銀を得るものは晴雨寒暑を問はず就業の時間九時乃至十時間にし通例七時に起きて夕五時又は六時に止むこ其の規程のととのへるその約束の行はるゝ實に嘆賞に堪へざる處なり

驪りて邦人の事を執るを見よ更に時間の規程を踐むことなく其勤むべき時に勤めを怠るべき時に怠るは其の懶惰遲鈍不規律なるまど朝野都鄙を問はず士農工商を論せざ大體一轍ならざるなし就中最も甚しきは労働者なり其工場に臨み煙草を喫し火を焚き幾度となく休憩し又其業に就くも遅鈍にして戯るゝが如く空談雜話を以て時を過し夏日に當りては悠々午睡をなし只空しく時刻を消し約にそむきて耻とせずか乃染職の明後日といふ諺あるも亦宜なり扱て又其休憩の時と云へば亦勞を慰め身を養ふまどを知らず或は飲食を恣にし或は睡眠

を妄にしてたえて攝養の法を省み彼乃友會の樂乃如
 きに至りては又問ふ處に非るに似たり
 抑々個人にありては出入度なく動止時なきもの、影響
 する處甚だ大ならざるに似たりされど之を一都府又は
 全國に推し擴めんには其害甚だ大なり彼の西人が一國
 の貧富盛衰を下するに民口の多寡を以てするはあれ民
 多ければ業も又盛んなるに依るなりさはへ人少きも
 善く働かむ一人にて三人の業と營み得べ久人多きも意
 情ならば三人合せて一人の功に及むざるべし去れを本
 邦の如きは未だ人煙の稠密を以て誇るべからざるなり
 論旨透徹せむ文また達意の要旨に副はざるに似たり
 幾分千篇一律の弊を脱しむるをたゝえんのみ(薇山)

成功と辛苦

古市 勉

天下青年の日夜憧憬するもの千差萬別なるべしと雖も
 要するに前途の成功に外ならず然れ共其成功や偶然に
 成り得べきものに非き身と卑賤より起して將相の顯位
 に上るものあり一小店員より起りて巨萬の富を重ねる
 ものあり或は一介の貧生より出で、大文豪となり名聲
 を後昆に馳する者或は理學を研讀して造化と其の巧を

争ふものあり均しくこれ成功也ただ彼れは物質的成功
 にして之は精神的成功なるの差あるのみ古來成功の桂
 冠を戴くもれ必ず勤勉の人なり忍耐の人なりさか
 の青年にして堂々紳士を氣取り狭斜の巷に荒亡するを
 の、如きは遂に與らざる也而して中學以上乃學校に學
 ぶ者の多きは徒に成功の果を見て因を尋ねざる者多
 空しく浮華なる空想に醉ふは何の故ぞ予輩疑なきを得
 ざる也見よ小村外相を氏の猶は外務省の微職にあるや
 破袴微帽平然として意に介せざりき米國屈指の富豪カ
 ーネギー又薩島の一貧家に生れ堅忍不拔遂に今日の暴
 富を致せりその他に新井白石頼山陽乃其史學に於ける
 瀧澤馬琴近松巢林の小説戯曲に於けるわつと、ふらん
 くりんの科學上の發明に於けるわづれか勤勉刻苦辛酸
 と苦楚との賜物に非る故を以て予は斷ず大なる成功の
 下には大なる辛苦潛むと
 思へ吾人の前途や崎嶇たり艱苦多く辛酸多し荷くも成
 功の果實を捕へんもの豈優遊して可ならんやただ勤勉
 と刻苦とあれ吾人の試金石なり
 引用せる實例聊か穩妥を欲久ものありと雖も今言は
 じ。吾人をして直截に評せざめむは從來忍耐說
 の變形に過ぎざるのみ。ただ行文まゝ見るべし。幸

ひに今後の奮勵を望む。(薇山)
 又曰。本號成功を論ずる者三。その潮流は遂に本會
 に浸入し來れる者歟非歟。

起てよ青年

伊藤 彦次

誰か青年を輕んぶるものを彼等は社會の繼續者なり未
 來乃英雄豪傑は實に吾人青年の間に潛めるに非ざや。
 吾人は常に聞けり青年は國家の元氣也と然り腐敗せる
 青年を有せる國家は元氣なき國家也元氣なき國家は病
 然る國家也病める國家は早晩滅亡すべき國家也殷鑑遠
 からず支那の少年に見よ朝鮮乃少年に見よ。
 理は即ち均し活氣ある青年俊邁なる青年を有せる國家
 は興隆すべき國家に非ずや活動すべき國家に非ずや獨
 乙の青年は如何英國の青年は如何。
 驕つて思ふ吾人日本帝國の青年は果して如何の態ぞわ
 が大和民族は由來勇往邁進の氣に富める人種也彼の三
 韓を討ち蒙古を剿し朝鮮征伐となり和冠となれるも乃
 要するに斯民族特有の氣象の具體的に發露したるもの
 に外ならず然るに徳川氏政權を把りてより人民泰平に
 馴れて華美乃風を致し進取の氣象漸く消盡しき加之一

たび瓊國攘夷を國是とせしかむ幾多れ英雄豪傑は滿腔
 の經綸を抱いて空しく北邙一片の烟と化したるは眞に
 千古の恨事に非ずや吾人史を繕いて當時の志士の事蹟
 に及ぶ毎に未だ曾て九腸寸斷せざんを非る也。
 浦賀灣頭一發の砲聲は桃源裡春眼を食りつゝありし邦
 人を覺醒せしめき明治維新の大業は眠りとり醒めたる
 大和民族が元氣の發現に外ならざる也。
 維新以還階級は打破せられて四民平等となり商賈にし
 て戎劍を握る者あり農家また政治に奔走するに至る職
 業に貴賤なく階級なし世人は業に醒めたり何を闊闔と
 言はん何を階級といはん要する處は自家の才のみ自家
 の識のみ。
 仰いで天の一角を望めば妖雲慘霧毒霧蟠延して今正に
 四海を掩包せんとす世人皆曰く國家の大問題目睫の間
 に迫れりといれ實に青雲に志すの十が起つべき秋なる
 を記せよ所謂功名手に唾して待つべきは今日を措いて
 何時をか期せん。
 今や吾邦は驚くべき長足の進歩をなせり而してその進
 歩の速度や他邦未だ曾て比すべきものを見せ豈又盛ん
 ならずや然れどもその進歩や要するに受動的にして能
 動的に非ず曰く泰西文化の輸入は刻下の急務也とかく

して一意皮相を摸倣し未だ深く國脈の如何を顧るの暇なく國內の形勢を察するに及ばず大は法律制度とり小は日用の雜具に至るまで生香活刺未だ咀嚼消化の暇なし見よ所謂文明輸入以來一人の獨創新發見をなせる者なきに非ずや。

噫「絶島結國意氣豪西南決皆萬里濤」といへる鍋島閣叟乃吟何等の豪懷ぞ『流れ行く吾身藻屑となりぬとも君白浪となりて答へよ』といへる菅公の詠何等の赤誠ぞ或は山田長政の暹羅に於ける壯圖は如き間宮倫宗の韃靼海峽を越えて黒龍江畔を踏破したるが如き白虎隊の殉難少年の如き是等の快男兒は大八洲に充實したるも不幸物質的文明の浸入に會ひて武士道地に墮ち元氣消磨し人皆蕩然として虚偽の文明に酔ふ嗚呼此の如くしてよく『チユートン』人種と競ひ『シンガ』人種と争ひてよく凱歌を奏し得べき乎今にして之が振興の策を講せずんば夫れ國家の前途を如何。

觀と來れば邦家の前途空たり漠たり夫れ空漠は暗黒を意味し暗黒はやがて多艱を意味せざらんや舊へ日本帝國の快男兒起て神州の眞男子彼の亞細亞の大原野印度の好山水南米の豊原太平洋の海上權安んぞ我日本男子に賜賢せる大勳章非るならんや一片秋々の氣あら

心須らく起て起つて大和民族獨得の元氣を發揚せよ今日は高枕安臥の時に非る也。
氣を以て勝るの文乎。文字の妥當を欲久々如きは今姑ら久言はじ。推して『益山尺水』中の白眉とせん。
(徽山)

THE MOON IN SUMMAR

By E. Tamura.

The moon is very life for me in the summer time. Cherry-blossoms, the fairest beauty of the spring can not be seen any more, and the young leaves of trees in my yard are dense green. The bamboes near my house spend out their leaves luxuriantly and dew-drops roll down from those leaves by a wind-blow. Then the silvery, sickle-shaped moon is rising up the clear, brood sky. In such a time I feel very, very pleasant.

I have taken bath and became very much refreshed. Being in high spirit I wandered about the yard, and applied water to the grass and trees for a while. I looked like a passing rain and dew rolled from leaves to leaves in a flashing manner, the minimized moon-blaw twinkles among the

green leaves. O, how lovely they are! I cannot find anything so beautiful as this.

In the evening everything is fresh and cool with a sudden rain, the clean dew is flourishing everywhere and quite. I forget the intolerable heat of the daytime. At this time the moon is rising from mountain. I feel very cool just as I am bathing in a clean pool. What can be so pleasant like this?

I hit the lamp and was reading a book at the desk when the water-rail is cracking. I opened the door and look upon the sky. The moon is shining from on high and is throwing the shadow of the bamboo on the ground just like a picture drawn with ink.

たれわんみやげせいとん きんじよう
臺灣土産生蕃の近狀

野村二郎

エー茲に諸君に御目に掛ります生蕃の近狀の大畧は八月四日夏期大會に出席致しました節諸君に乞はれた儘止を得て投書しようと思つた原稿を其儘御話申し上げましたので、今回雜誌發行に就いて編輯部よ

り何がなご切りに矢の催促を受けますので再び他の珍聞を探す暇をなく聊か原案に尾を付け羽を加えまして御免を蒙る次第で其時御出でになつた諸君は下世話しれ繼目やらで、嘸興を醒されたとどろうと思ひながら先づ此處へ罷り出でました、所で御話し申す順序は第一穴居の狀態第二通性第三宗教に伴ふ行為觀念とであります。以上實際に見又は新事實を述べたものでありまして終りに祭禮、銃器密輸入、の件につき強ち妄想説でなからうと思ふ節々を挿みしました

私が會員諸氏と袂を分つて臺灣へ向け出發致しましてから能く考へて見ますと月日の駒の足の早い事は實に驚久計りでふいまして、つい昨日諸君と御別れ申した氣で居ましても既に今日は一年有半渡臺して居つた譯だそうで、毎度ながら驚くの外はありませぬ、私しが渡臺中常に忘れるおどが出来なかつたのはフアルストサイトの基隆港で移りました、又臺北へ来て見ますと商業の活潑なのや土木建築業の進歩に就ては寧ろ豫想外でありまして、尙在北中でも新陳代謝の烈しひので常に驚いて居りました、此の臺北の風俗人情等は雜誌へを出しましたし、又石島君に臺灣事情として送つた

譯ですが又初まつたと横鎗を入れられない内に止して生蕃の近状を御話し申そうと思ひます、所が蕃人の風俗の大畧は己に八号で御目に掛つて居りますから其等の範圍を脱した何の面白皮切りて而も趣味のあるやつを記憶から引張り出させよう、暫時御清聴否御清讀を希望します

私しが丁度屈尺なる土倉氏の事務所を頼つて行つた時でした（此の土倉氏の山林經營の次第は先号に明らかなり）其晩泊りまして其翌日午後三時頃木山と云ふ人の厚意で蕃人の穴居の有様を覽んとして案内を受けました、其時は程近き山谷にありました故各ピストル一挺と野犬一疋連れて木山君には實弾を裝置せる皮帶を占め連發三挺を用意し出發に及びました、其時は非常に風の吹いて居つたのであつた計りか溪流の縁を縫つて行きましたので随分困難を感ぜられたが間もなく平原へ出まして丈程ある草木を掻き分けて二十分計り忽ち兀然たる山の麓へ出て直ちに蕃窟の一つを訪ひました此木山と云へる人は跡で例を引いて御話し申上げますが蕃界で非常に聲望があり且つ尊敬されて居らるゝ人でしたら一聲の口笛で、瘦せた眼ばかりびかびかして居る生蕃が出て來ました、ときに木山君が申されるの

に此の蕃人は非常に此の蕃社で巾利きの奴であるから呉々も感情を害さなげ様に頼むと申されまじいので一同唯々と答へました、一体おちらは非常なる歡待の意を表するときは必らせ寄つて來て手を握り合ひます慣習がありまして、又木山君も一寸注意を受けましたので吾々も恐るゝ握手の禮を濟ませまじいでお木山君は暫時陸まじしやうに話しを爲て居られまじし直きに兩人の姿が見えなくなりまじしたから一同土穴へと這入り掛けます、其前に私共が非常に驚いたおは彼れが着て居る赤衣でと申して丸で赤ではな久只チヨツキの如き衣服の背に赤筋が三本計り染め抜いてあるもので多く祭禮の前後に着るも乃ですが是れが即ち新神換言すれば生首を獵る季節であると云ふおを暗に表示して居るものであつて此の赤い縞のあるチヨツキは深く臺北乃婦女女子を恐れしめて居ると云ふ位ですうら現在目前で之を見た私共は誠に厭な氣が致しまじいゝ、話しが後へへ戻り穴へ這入りまじすと入口の上に小鹿の生首が一つの横木に括つて吊り下げ未だ取つた計りと見え下の丸き敷石に鮮血が滴々と跡を止めて居りまじした、此の入口の構造は鑛山乃入口の如く丸木で組み立て礎を石垣としたものですが先づ正六邊形と見て差

支は御座いませせん、段々と這入りまじすと兩側はすらりぞ鹿の肉を吊るしありまして其下に樅木の大皿があり血が溜つて居ります、其臭さ加減話に成りませせん、其の直ぐ上に幽かに南京豆の絞りを燈火としたのがありまして室内は先づ漠然と判りませす吾々は暫ら久鹿の皮の引いた竹床の上に腰を下ろして居りましたが先程出て來た先生切りに鹿の生肉に鹽をのき交せたのを手でつかみゝ食つて居ります、其口と來た日には眞赤でしゝ、其片隅に裸体の一小兒が居りまして麴の如き物を血の溜つて居る皿の中で混ねて居りますから何事かと木山君に問ひませすとあれは砂糖を含む草を壓して出た汁と三つ交せて蒸し菓子を製するのだとの事です、臺北でを矢張屢々豚、鴨、等を殺して其生血を取り菓子よませるが多分其れだらうと合点致しませす、薄暗いので判然見えませせんが腕の半迄血汐に染まつて居りました、主人公の臥て居る直久後側に鉄砲が三挺計りありましたが一挺は確かに村田式で他は外國の銃と見受けました、総体磨きつめてありましてピカピカと光つて居り又此れが首狩りに持ち出されるおこかと思ふとツツト致しました、此暗い所に居るおと三十分計りで此れ臭氣ある蒸し暑い土室を出で木山君の案内で首

棚の拜見も出掛けまじい、一体蕃人は首棚を秘密に藏して居りませすが殊に日本人には非常に嫌ひませす、現在木山氏が己れでなけれお見るおとは出來ない等と吹きましたがお全く容易に見られなものですから我々も大に喜びました、山を上ぼるおと半丁ばかりで其處に嚴重そうに木を組んで出來お戸がありまして其れへ這入ると首棚の後側に出まじしたが前面に廻りませすと兼て胸に書いて居つた首棚と違つたことおありませんでしたがお悲しい様な思ひが胸に迫つて來まじしたので今更ながらぎよつと致しました、棚は先づ梯子段と思ふべしで其れに行儀よく頭顱が百六七十個すらつと竝んで居りませす加之に皆赤き布や白き布で札が付いて居りませすが風におほられておと鳴りヒューと響く等恰おも私し等か來たので非業の最後を哀れに訴えて居るやうに聞ゆるので氣の毒のやうな悲しひ様な思ひは沸いて參りませして、思はず涙が出まじした、友人等も言ふに言はれざる悲慘の相を顔に表はまじした故木山氏は早くも覺られてお出とらゝと無理に引連れられ外に出まじしたお時に六時を時計が示して居りまじしたので早々飯宅に及びまじした、次ぎは彼等の通性です併し蕃社蕃社で風俗宗教等も相違致して居りませして智識幼稚の結果

より彼れ等の信仰して居る宗教が多く彼等の行動の上に効力を興へ又性質を變せしめる様な不可思議な現象を呈しきるので一概に斯と指摘するおとも出来ませんし又斷定するおとも出来ません、併しながら苟も彼れ等の稟性即ち純粹の天性を申すと妙に聞えませんが前に述べた様な變化極まりなき彼れ等の性行ですから斯ふ言ふ語を附記致します天性は決して變はるものではありません、其處で彼れ等の家系を尋ねて見ますと極く昔は何うも北清地方の土民ではなからうのと言ふのです、元來支那人は機敏であります併し悪いおともには少しするお處で蕃人は何ふか言ふと前者に對しては余りに正直で後者の勇悍悍猛なるに比し前は不活潑である之前者は山林なせは見たおともなやうな平坦なる土地に住し後者は溪谷に住んで居るので其境遇が其行為精神に及ぼしたのであるが先づ蕃人の系統は地理學では立派に書いてあるが未だ當局者が各蕃社への系統に就て充分研究してると言へるに角或新聞に北清地方の支那土民云々と載せてありましたから一寸申上りましたので、處で今一つ蕃人の性行に加えたものは彼れ等は各蕃社内にて嚴重なる規則があるおとも見え義務を重んじ人情に富んで居るおとも未だ嘗て思は忘れ

たことはなぬ、其處で嚴重な規則により云々と云ふ今日吾人の眼で見ると規則があるから其の様な行ひを爲なければならぬのであろうと考ると中々左様でなぬ彼等乃規則は即ち彼等の精神であつて吾人が規則に對するとは甚だ觀念が違ひます、實に此三大要素が蕃人に備はつてると思ひますと異に愛すべきです、今好例を擧げませうなら毎度御座るに上る木山君です、此人が始終土倉事務所に留守居で鹽、燐寸、蕃刀、火酒等と交換してやりますより非常に敬ひ慕ひます、其勢力乃あるおとも寧ろ豫想外で、丁度此人が極く近所の山谷へ獵に出掛けたときだそうです、其時は恰も新店街うら屈尺間で旅團演習を行つた時ですが生憎此時近隣に居た蕃人は恐ろしき誤解をしまして早速かれおとも二百名足らずの仲間が山上に横に一刻に布いたろうです處が真中に松の竝木を拒てるものですか能く見ぬおとも或る分隊は全く知らなかつた位だそうで隨分譯を分らない混戦だつたそうですが恰かも此時此細道を通り掛かつたのが木山君でそれが不圖見れば如何にも實彈の音がするので、能く耳を傾ければ時々カチーリヒューと云ふ丸乃飛ぶので氏は驚いて立ち縮んで居りますと突然バタツと蕃人側の銃聲が絶えたので木山氏は早速

飛び行き誤解なるおともを口早に話して手で皆のものを集め陸軍の演習なるおともを云ひ聞かせましたのに蕃人共は非常に喜びまして各々歸つたと申しますが、跡で兵士の申しますのに蕃人自ら叩き破つた橋をすつかり修繕して立ち去つたさうです、是れは木山氏の直話ですが銃聲が一時に止んだのは實は木山氏に丸が當たるを恐れたので如何に其の慈愛が染み込んで居るおとも分ります、實に感服の至りです斯くの如き舉動は宗教の感化力と天性か動機で發するおともしやうが兎に角宗教が彼等無智の頭腦に効績を表はしますにより、二三十年前には續々宣教師が入山して擴めました、今回日本の領土を成りましてより京都邊の有名な牧師を渡臺せしめ樟木伐採の利益及び蕃害を未發に防ぎ策略を凝して居るおとも聞かされましたが、彼れ余りに多食に疲れて飛んだ間違を起さなければおとも心配して居ります、首狩り等は非常に蠻行の蠻行であります、是れ實に數十年來の慣習でありますから一時に打破することが出来な計りの吾人等の恰かも神社佛閣を取壊わして之れが拜崇を止め僧侶を一時に焼き殺して仕舞へと云ふやうなもので、其感情の衝突は俄かに蕃行に發し腦察は打ち倒され樟木の運輸は全く此處に一大

故障を起し來らんおとも目前です、故に森林經營者及び鹽業鑛業等の當局者は如何にして彼れが慣習的蕃行を消滅すべきやは今尚將來とも煩悶の種たるや疑ひません、其處で吾々の首は彼等には如何と云ふと一體彼等の社會では財産を云へる論議物であると云ふて貨幣は全々流通致しません、併し此れにも勝るものがある是れ即ち人間の頭で自分の家門の名譽權力を表はすのは此の頭顱で、若し此れ頭顱の数が少ないおとも非常の輕蔑を加えられ、又澤山おとも權力ある故酋長にも推されるおともあるおとも彼れ等れ首に對しては生命に拘はることあるおとも願ひなぬと言ふ位渴望するおとも強ち無理ではありませぬ、吾々の頭は彼等には尊き神である何と奇妙な風習があれおともあつたおともです、飯國前彼等の觀念を説明すべき好辭が臺北に傳はりました、其内新事實とも云ふべき奴を御話し申させう、此間撫番當局者が數名の蕃人を引連れ母國の風俗や文明を見せてやろうと或る目的から内地觀光にやめて來ました、善人は皆鳥の鳴き聲や鹿の駈ける音位の音聞くおとも出来なぬ深谷に住居して居るのですら嘸東京へ着て其繁盛なる景況を見驚き且つは羨むだらうと豫期して居りました、所案外です何處を注意し見物するお

ともな久只キヨロくして居つた相です此キヨロくたるや亦交通の激烈なのに驚いたのもありませんが文明の風觀が彼等の眼に映つても何等の感起さなかつたと言ふのは實情をいへばありませんか、其れから是れは到底効果はあるまいと言ふので直ちに飯臺の途に就きました、途中大坂を通りました節二挺の鉄砲を貰ひましたのが彼等乃満足を買つた様子でした相て、先づ海上無事に臺北に着き日の丸館を云ふ北門街の旅館に投じました、愈々明日は入山しなければならぬと申して居りますと番人は改まつた調子で非常に感謝の意を表しまして扱言ふのに私も明日入山しなければならぬが我子孫にも友人等にも貴殿の親切を一つ話として傳へやうとします、其れに就て何か記念になるやうなものを持参して販りたい其處にある洋傘、帽子、時計、錢入等は私が販つて見せても喜びませんやうか貴君の首が戴けませんでせうのと問ひました、言ふ奇談がふいます、又二年計り以前の事實に宜蘭の羅東かに或役所の官吏が居りまして不圖したことから番人の娘に思はれまして遂に物好きの人もあるもろで其の女と結婚の約を結びました、所で吉日を選び祝宴を開きました當日には番人の親族が一同やつて來ま

して先づ高砂やを諒つたか如何が知りませんが其夜は親族が泊り込みました、其翌日或人が用事があつて其人の家に到りますと戸があきません、不圖見ると血痕の跡があります、其人も若しやと思ひ戸を蹴破つて這入つて見ますと奴の首がなかつたを申します番人が此行爲に及んだ深意は一目瞭然なりで娘は此新夫が可愛つて久て堪らなものです、そこで戀愛の情が募つた結果此番行を敢てした譯で即ち親達はおうやつて娘を離すと番社に此の可愛い首を持つて行つて永久頭顱と階老同穴の契を結せやうと云ふ面白く趣向でドウモ番人の娘にラヴされると飛んだおとになります、由來ラヴは真正であると言ふが若し番人が此事を了解して居らぬもせよ文明人か之を察して見れを果して是が真正な手段であるかも知れないので所かわれを品變るとやら一寸老婆心から君等に警告して置きます、何うて是等は宗教より來る慣習行爲の一端を窺ふに足るてせう、次ぎに申上たものが彼等の祭禮て是等は誠に見る人が少なからぬので必らせしも誤聞を免れせんが併し全で嘘でもあるまいと思はれる確かな一例を引張り出せば先づ番社の擧つてやる重大なる祭禮の一つで最初導者と言ふべき人が口々に呪文を唱えながら辭や

炭の炎々と燃えてる上を跣足のまゝ通るので、之れが濟むと導者自ら持つて短劍で身体と言はず顔面と言はず一面に傷くるので之れが終ると廻りにあぐらをかいてる番人等はやんやと喝采の聲を擧げ木魚を叩き鐘を鳴らし笛を吹いて擔架の如きものに血だらけなる導者を擔ひて入山すると云ふ慣習があるやうで、兎に角祭禮のある前一ヶ月位は殊に甚だしく諸方の山谷に出没し掠首するので多く十一月十二月です、故に其季節になれを内地人に限らぬ、土人すら入山を見合せるので其れで比較的祭禮の實況を目撃するものが少ないのでおろうと考えます、題は變りまして申上げるが番人へ何者が新式乃鉄砲を密輸入するかと云ふ疑問です、是れは山林經營者及び木山氏の言等を考證とし考ゑますと中々重大な事件です私が飯前不圖したところから一の證言とも言ふべき説が朋友からの信書に見ゑました、其れは同じ學校に居た奴で即ち一昨年九月同時に這入つた生徒ですが始終校内で評判になる程清國事情に就いて熱心に研究して居りまして私しを随分第一に彼れに指を屈する程あちらでは親友でしたが其後五ヶ月計りにして突然退校し直自己乃素志を果さん爲めに對岸厦門に飛びまして貿易商サーレの許に

使はれて居りましたが、當時は天津の支店に遣られて居りますが此奴非常に臺灣語は勿論厦門語北清語等に精通して居りませぬ故、屢々北清事情の一斑を面白く申して送り來りますが其末尾に頗る奇警なる報告が有り、其書いた所を見ると生番へ銃器を密輸入するのは一に支那人で而かも北清人の所爲であるや云ふとが殆んど信すべしであると言ふのであつて其探つた緒口は北清の或商人の製造品に就いて不審を打ち調べたのだらうで彼等の手段は如何かと思ふと臺北は臙臙に直接に番人に接する一雜貨商がありまして其商記は此處に憚ります此れが謂所對番人物品交換所で彼れ等が銃が欲しさに價格に積つて大した物品を甘々と奪はれる、銃器は僅か二十圓位のものである番人の持参する物品は價格に積つては非常に多額に達する相で土人等は莫大なる利潤を得る乃で此れ等の山出しの物品は器械の藪々工場を通るか或は支那人的の濃艶なる細工を施して多く婦人乃裝飾品に歡迎せらるゝ相です而して此れ等は皆文明の器具に形を變じて居るので俄かに指摘するおとが出来ないが兎も角唐木細工の如き染料の如き帽子の原料、鹿皮、穀物其他であるやうですが何れにしても廣東地方、北清地方に流布すると云

ふ相で此う云ふ有様です。向後到底銃器の輸入は消滅しますまいが又掠首を全廢することも出来ません。せう、此の密輸入に就て在清の日本人は是れに或る原因を含んでも言ふし、又は蕃人を馴付け文明の利器をドンドン輸入し新殖民地の強敵を養成しやうなんぞで陰謀があるのではないかと言ふ風説もあり相ですが、先づ犬の遠吠でしやう、私も最早母國の人であります。後三年をもちに居りまゝたら随分氣焔も舉がりますが兎に角一年半です。直ちに種が盡きますので何れ又在清友人よりの書簡を種として次號には北清風俗の新らしきやうなのを申上るおと致します。御退屈様でした。

(終り)

幼時

くわんする生

○「アラレ」といふ雜誌で「幼な顔」といふのを募集して居る、おれは各々自分の幼時の出来事や感想を書くので、非常に面白く感じた故自分もそれに倣つておむなものを書いて見た。

○まだ極く小く、守におまざつて居つゝ時分、とく公園へ遊びに行つた。夕日が秩父山の向ふに落ちて、晚鴉兩三羽お誦訪様の杉の木へ戻る頃、漸々家へ歸るのであつた。其時分は僕が被つて居た海老茶色の毛糸の帽子が今でも残つて居るが、その帽子を見ると、自分の幼な顔が有り／＼と顯れる様に思はれるのである。

○六ツ位の時だつたと思ふ。人が今になんになる？ 兵隊さんですかと聞く、かぶりを振つて「パン屋さんになるんだ。」と返して聞き返すと、曰つてもパンが食べられるじやないか。

○六ツの時。母と守に連れられて始めての東京見物。小石川の叔父さんの家に大弓場があつて、頭に弓の稽古をしてゐるのを見て羨ましく思つたら、叔父さんが小さな弓矢を買つて下さつた。僕は嬉しくつてたゞらぬ。それをかき出して朝から晩まで雀を打つて居たが、一羽を取れぬ。東京の雀ははしつこいなアとつくづく思つた。

○「アラル」といふ雜誌で「幼な顔」といふのを募集して居る、おれは各々自分の幼時の出来事や感想を書くので、非常に面白く感じた故自分もそれに倣つておむなものを書いて見た。

つゝも、其時分僕がやつた豆が當つたのかも知れない。尋常一年級の時。三年であつた僕の兄が四年級の者にいぢめられて家へ歸つたのが實に久やしかつたので「誰だ。〇ちゃんを泣かしたものは？ 敵を取つてやるから今〇ちゃんをいぢめた者は皆んなのゝつて来い」と泣きながら怒鳴つた。四年級のものには僕を可愛そうに思つたの少しもが／＼つて来なかつた。

○其時分。僕の理想は英雄は加藤清正であつた。蛇の目の紋の付いた烏帽子と木製の槍を買つて貰つて、自ら清正を氣取つて居つた。泣いた時にも、えらい／＼加藤だぜいへむだまつてしまひ。利巧な清正だといへむ持つてる煎餅も皆んな呉れてしまつた。

○紙の烏帽子に木の槍の小加藤が、子僧をどらへて馬となしハイドウ／＼と乗り出すはよひが、ころがり落ちて膝ッ瘤などを摺りむいた時の顔つたら………。但例の加藤だ／＼で泣く事だけはしなかつた。

○七ツ時。僕の家の隣の其又隣家の下駄屋に火事があつた。僕は往來へ飛出し、燃上る所が實に奇麗なつたので手をうつて面白がつた。翌朝起きて見ると、丸焼になつて白煙ががなし／＼に立上つて居たので昨夜手をうつて騒いだのは悪いおとだつたといふ。

○藏前の親類に泊つてゐる中、毎日／＼観音様へ行つゝ時にとると一日の中に三度も行く事があつた。僕は鳩に豆をやるのが面白くつて／＼幾度行つてもあきるとはなかつた。近頃新聞に鳩が毎日の様に變死するやう

○其時分、僕の家の薪小屋に大きな三毛の野良猫が住んで居た。或日僕は近所の子供を集めて遊ぶで居たが不圖此猫を思出して、猫退治をやらうとやないかと思つた。なに相談した。何しろ遊びあきて居た所だから評議忽ち一決して、手に／＼玩具の鐵砲……赤い紙の彈丸を潰すとパチツと音のする……を提げ、列を作つて薪小屋へ押寄せ、僕の號令で一度にドツと發射した。此物音には流石の三毛も一溜りもな久敗走すると思ひの外、目をむき牙を鳴らして向つて来た。其勢に氣を呑まれ我軍忽ち総崩れとなり。総大將の僕を、汚し返せとも何とも言はず、命から／＼逃げのびた。

○其猫がひどく恐ろしいので、それから後度々猫の化けて来る夢を見た。今でも犬は好きだが猫はどんなのでも嫌ひだぜうも氣味が悪い。

○おふふ様などは、書けをまだいくらでもあがるが、又折があつたらとして、今度はおれだけにして置く。

(おはり)

惑問一則に答へ并びに
愛泉生足下に謝す 綠 綠 生

前號に就て予の述べし、蟬噪一東中「明治文學に近くべからず」といへる項に對し量らずも、愛泉生足下の怪訝を醸もし、「或問一則」と題して滔々數千言、余に訓へを垂るゝに深遠なる、神聖なる文學の分類を以てせられたり。借問す。足下果して、如何の典論をか有せる」といへる峻烈なる筆尖に遇ひて、予は逡巡、冷汗淋漓たりき。足下乃炯眼果して、予の未だ文學に就いて、明確なる概念を有せざりし事を洞察せり。洞察正に命中、余將に斃れんとす。此時に當り蹶躍一番、足下の辭に尙へざるべからず。眞に予は未だ高遠なる文學に就て窺はざりし、又未だ伺はざる所なり。深く其れ罪を謝す。故に予は文學なるもの、分類若し久は定義に關しては、筆未だ及ばざりしならんこ記憶す。實に學術的分類等の借借を離れて、通常、眼に觸るゝ種類に就て述べしのみ。然らば予は如何の事を論せしやと、いふに文中既に明かなる如く不健全なる文學をいふ事に就て筆を弄したるなり。然れども予は足下に依りて甫めて明瞭なる文學の分類を就て示せられたるを深く謝するものなり。されど廣量なる兄の譯語の名詞に就て予が論説といひしを「評論（論説といふが如き名詞なし）」等の事を云々せられたるは、甚だ余の

快とせざる所なり。又「廣狹孰れの場合にも訓話といふが如き名目なし」といへる、訓話といふ事が、足下の眼光予の胸奥を照らせし燈明臺なりならん。然れども足下よ、足下恐らくは「文學汎論」の如き所謂翻譯的文學に就て論せし書に則りて、予に示されたるにあらざるか。少し眼を放て我國文學を觀せよ。例へば橘成季が著したりといふ「十訓抄」(内容を涉獵せず實に十箇條の教訓を知れるのみ)の如き、貝原益軒の「女大學」近頃は、福翁の「新女大學」「浮世談」或は桂月の「學生訓」等を以て、文學なるものとして見ざる。是等は予の所謂訓話なるものなり。然れども是等を以て叙事なりと言ふ或は然らん。評論なりと云ひても一斑斯くの如き所もあらんやなれども、予は此れを以て一種類と觀たる者なり。更に云ふ、訓話なるもの果して何れの項に屬すべきかは予の知らざる所なり。ただ足下が訓話といふ如き名詞なしといへる、又對して、聊か陳ぶる所ありしのみ。重ねて云ふ、予は更に文學の定義乃至分類を述べしにあらざりし事を、そは予の拙なき稿に就て諒せられ。然るに兄が余りに文學を好愛し熱衷するの結果、影を幽靈と謬まり、大蛇の横はると見て老松なりし儔ならんと思ひ爲せど、とにくく兄

の老婆心否な親切よりして、愚生の得たる處……必ずしも足下に待たせむがかながら……多大なるを謝し、併せて一言蕪辭を具し、尙は余の意を白す事此之の如し。兄幸に言の鮮腆倨傲ならんを容るせ。敬具九拜。

解 嘲

愛 泉 生

枝葉の論議は今姑く措く。足下は問ふ「訓話は文學に非る歟」と。予は答ふ「然り。訓話は斷じて文學に非ず」。

足下、智情意の三者の儼として區分せらるべきは心理學の吾等に教ゆる所に非ずや。ただ然り、情的方向を支配すべき文學を、意的方面を主宰する道徳と當然區分せらるべきや論なき也。

試みに問ふ、足下がいはゆる文學とは何ぞ。學問即文學乎、文章即文學乎、そもく文法即文學乎。されば三者の如何なるは最近の美學の證明する處に非ずや。若しそれ美的想像を書記して他の美的情操に訴ふるもの文學なりせば、訓話は明かに文學以外に驅逐せられざるべからず。再び問はん、訓話とは何ぞ。足下の文にとりて之が概

念を作るべく困難なりと雖も、姑らく予をして揣摩せしめ人の道徳的意識に訴ふるもの、要するに倫理學の範圍に包含せらるべきもの也。その辭はかま美なるも、その文はかに妙なるも以て文學の名を冠すべきに非ぞ。蓋し根本の目的の、全然文學と異なるものあれば也。

『新女大學』『學生訓』は訓話ならむ、然れども道徳的書物によつて誰かミューズの囁きを聞き得るものぞ。そもく純潔なる美感を惹起すべく、いはゆる訓話は果して何の要ぞ。故を以て予は貝原益軒、福澤諭吉を稱して文章家といふに異議なし、文士なりといふに至つては斷じて肯んせせ。

更に之を説かん、文學は直覺し、科學は分析す。直覺したる處之を描寫するは文學にして、分析し解剖したる處之を説明するは科學也。吾人は道徳書にとりて人をしてなさざるべからざる道を教へらる。文學は如何なるの如何なるものなりやを吾人に語るのみ。一は教訓し一は談話す。兩者の別以て見るべきに非ずや。今に於て道徳即文學の見解を持つるの徒、その愚や及び易からざる也。ただ一言すべきあり。今日の文學史は益軒等の道徳書

を包含して憚らば。これ蓋し止むを得ざる處なりと雖も、純なる文學は決してその種の文學を容れざることを記せざるべからず。

吾人が訓話といふ名目なしとぬへる要するに如上の見解に基く。足下説あらむ重ねて聞き得ん乎。妄言多罪。

編輯餘言 薇山

▲佐藤久一氏に謝す

(前略)小山君から承りましたが原稿が寡ないことや從來の如く薇山氏も六かしい事言はせ成るべく漢文直譯牀でも御採用願いたい。さもないと後進者の諸君の不平勝であらうと思はれます。

薇山生の逐號の御書察は誠に多とすべきですが、御承知の通同君は文學的のインクリネーションを持たるゝ事として、何かにつけ文學的趣味のみを取りたがる。兄之を調和して下さい。(下略)

おは佐藤久一君が遠藤勸一君に宛てられたる私信の一節也。もと公開すべきものに非せと雖も言ふ所或は會員一部の意嚮を代表せるものあらんを思ひおゝに公開

り來れる原稿を添削し整理して忠實に熱心に纏め上げるのみ。予不肖と雖も本誌は性質を知らざるほど爾く無心ならんや。忍學友會雜誌は忍學友會の機關なり。最を正確に最も切に具體的にわが會を説明するもの機關誌を除いて何物もよく企及せん。ただ然り、もし予にして成心あり妄りに自己の嗜好に任せて記事の選擇を事とせむその罪正に萬死に當る。然れども予は斷言す、予は未だ曾て非文學的なるの故を以て恣に没書したるが如きと斷じて之なきを。

君の眞意は蓋しおゝにあらざるべし。ただ傾向の予が上にあるを愛ひたるにあらん乎。傾向は傾向也、事實に非ず。予は謹んでわが過言を謝し且つ君がこの憂悞をして杞憂と止まらしめんを誓ふ。

大體の上より見て本誌は近時著しく文學的色彩を帯び來れり。予が從來は態度より見て君が之を以て予編輯の結果なりとせらるゝは必らきしも一理なきに非るも之れ深久吾人の内情を知らざるの致す所なり。誌面の整理上吾人は時に没書の擧を敢てす。而もその理由はただ下の三件のみ。文章拙劣添削の勞少なからぬもの、論理の一貫せざして加筆の餘地なきもの、及び剽窃の疑あるものおれ也。おれ以外文の陳腐なるもの

して併せて予が意の在る處を明かにせんと欲す。又可ならんや。

前號の紙上予は種々なる注文を提出したりしと雖も退いて思ふ予が言は餘りに高きに失せざりし乎會員が作文の程度よりいふも予が言は難きを人に責むるものに非りし乎。され予はただ千篇一律なる記事論說文例的陳文を斥くといへりしのみ。未だ嘗て漢文直譯牀を排すといはざるも。もしわが注文の高きに失せりとの批難ならん予は謹んでお請せん。直譯牀排斥は予輩の夢想だに及ぶざりし處恐らくは君が何等かの誤りたる記憶にあらざらんや。この一事深く辨明するの要なからん也。

予が文學的の Inclination あるは予又知れり。曾ては激しき文學鼓吹者たりし事また事實也。然れども今日の予は決して當年の如き激烈なる文學注入論者に非る也。敢て文學に對する熱心衰へたるに非ず。ただ會員の投稿を閱して現下會員の智識と鑑賞力の如何の程度にあるやを知り得るの極こゝにわが希望のあまりに高かりしを悟り了るが爲めに漸を追ふて進み行かんと欲するに至れる也。

余が本誌の編輯については一毫私心を交へずただ集ま

をを數へたりしも今は止めたり。而して文學的なること否せば未だ始めより問ふ處に非りし也。今君が參考のため没書せる文章の題左に擧げん乎。

夕立、勿垂延順境、大雅堂の熱心、春の野、處世論、堀切の菖蒲を見る

總計三十篇に餘る投稿の中没書に附せるはただ是れのみ。され誌上に採録せらるるものは投稿の全部也といふも未だ必らずしも過言ならじ。業に然らば今號の誌面の文學的なるは畢竟するお會員の多數が心を文學に寄せたるの結果として見るの妥なるに若らじ。之を以て編輯者も予を咎むるは吾人の惑ひなきを得ざる所以也。本誌に對する予が終局の理想は要なければ言はせ。ただ清濁併せ呑んで練々たる大洋の襟懷と吾人が理想なるを一言し置らんのみ。

之を要するに君が注意は予の肯じ難きもの多しと雖も本誌に對して多大の注意を拂はるゝ一事は予の感謝に堪えざる處也。予は本誌の常に會員の注意を惹くおとなく何等の反響をも聞かざるを憾みしたり。今にして君がおの注意に會ふ。空谷梵音の感なきんをあらせ乃ち憚る處なく所思を開陳せる所以也。足下希久バ言の禮さを恕せ。足下が言は予にとりて知己の感おれバ

也。妄言多罪。

▲本誌と文學趣味と

友人怨月と盛んに文學趣味を注入せんとして秃筆を呵したりし事今思へば多少の感なきを得ず。近時本誌に文學的色彩を帯せしめよといへる要求を耳にするにつけて益々時勢の進歩に驚かざるを得ず。されどこは要なき線言なり。本誌に文學趣味を注入するの一事について聊か考覈せる處あらんか。

文學趣味を以て人を懦弱ならしむるが如く誤解せる人物は齒牙にのゑるに足らず。没々たる現時の自稱教育家輩も眼中に措くに足らざる也。且つや風氣の頽敗今日より甚しきはなきもの要するに國民が品性の下劣にして酒色以外の慰藉を解せざるに基くを思はば文學の修養決して忽ますべからざるや明か也。おは前號に於て予の詳論したる處おゝに繰返すの要なけん。予はそのいかなる程度まで本誌をして文學的ならしむべき手を致へざるべからず。

明かに本會々員の鑑賞力は三途也。一部少數の人士は文學の真相を解し進んでは外國文學を味ひ前代の文學を究めて専門的智識を有す。その鑑賞の力や高くして深し。以て優に文學を語るを得べし。やゝ多數を占む

せる趣味を調和せしめんとする也。困難ならずや。蓋し一部乃人士は文學の何たるかを解せざる也。今若し卒然詩的論文を掲げ美文を載せ韻文を掲げんには是等の人士は嗚然として自失すべし。而してその解し難きを咄々べし。さありては本誌の實は全く失はれん特色は全く滅びん。調和といふ事や誠に可し。されど爾く高さ趣味を低卑なる趣味とは絶對に融合し難きを奈何すべし。

予を始めは只だ文學趣味を注入すれを足るとのみ考え居りしが實際を見れば思はぬ故障もあるを也。されば今は漸進的態度を執るゝの適切なるを信じて氣永に趣味は進歩を計るの外なけん。牛歩のよし遅くても休まされを千里の遠きを行くべし。

故にさしあたり予の執る處は些のづゝ文學分子と交へ漸を以て趣味の啓發を計るにあり。本誌以下予も非力ながら詩を論じ美文を品して聊か資する處あらんと欲す。望む處は狩野、山田等諸君が熱誠なる助力也。おゝに諸君が多少の苦心を経たる文學的作物——與ふべ久んを啓發的論文——を歓迎す。

會報

る一團は小説の趣味を知りて之を愛翫するも異に人世を知り世相を窺はんとにはあらず。文章は巧拙、落想は如何は之を論ふを得るも一歩進んで深く専門的に考察する能はざ。蓋し文學好愛者として世上一般に見る處は讀者也。更に他の少數は古の甘き香りを味はせ。狂暴なる本會殿を以て平家の公達よりも勝れりと見るの徒か。その好む處は殺伐なる講談のみ。

以上大擡みに區別しるが全豚の上より見る時は本會はなほ第二と第三との間を彷徨しつゝあるに似たり。弦齋や浪六や桃水や霞亭などゝをすればその愛讀書なるらし。されば本誌に文學的分子を加ふるについて多少の故障なきを得ず。編輯者たる予の苦心はおゝ也。美は普遍的也といふものからその人物の如何にとりて享受する處も亦異ならざるを得ず。さるから一部少數人士を對象として編せん乎。高尚に過ぎて多數の士には受け難し。されば眞に文學的價値ある雜誌を作り出さんには少くとも専門的ならざるを得ざるべし。然れども本誌はもと文學雜誌にあらず。本會は文學團體にあらず。會員の嗜好低からば之に従つて低き標準を取らざるを得ず。おれ蓋し止むを得ざる處也。而して文學趣味を注入せよといふ論者はおゝに二個の相拵格

三十五年十月十五日 役員會議を開きて來十九日に舉行すべし小會に關して種々協議せり

十月十九日 忍高等小學校に於て午後一時より小會を開く會者僅かに二十名に過ぎず、されど各自熱心に或は本會の過去を談じ或は將來を語りて不識の裏に厚誼を温め、餘興としてキヤッチボールを試み五時頃散會

十月廿八日 賛成員松澤重太郎氏は兵庫縣洲本中學校へ轉任せられたり

十月卅一日 我が熊谷中學にては三學年以上の生徒を戦闘員として比企郡菅谷村附近に發火演習を舉行したり

十一月十四日 役員會議に於て左の條々を可決す

一 本會支部を東京へ設置するの許否

二 八木橋祐七君の退會許否

三 圖書部家債に就ては一應相談すべしと

四 小件五ヶ條

十一月廿日 來廿三日に開くべき小會に關して役員會議を開く

十一月廿日 會員伊藤彦次君の嚴父田島信易氏には永く久病氣の所藥石其効なく他界せられたるを以て本會にては小山與四郎君に依頼して哀悼の意を表せり

十一月廿三日 忍高等小學校に於て小會を開く、會員諸氏の談話は殊の外面白く各自十二分の款を盡せり、今其次第を掲ぐれば

- 一本會の振起策他二件
 - 小山與四郎君
 - 高澤俊徳君
- 二多讀と少讀と
 - 遠藤金二君
- 三朗讀
 - 吉田庸光君
- 四運動部に就て
 - 増田耕作君
- 五お伽話
 - 松原良男君
- 六本會將來の希望
 - 村上義之助君
- 七榛名登山
 - 古橋龜一君
- 八擊劍振興についで
 - 右了つて一ヶ月分の會計豫算を變更す即ち編輯部へ補助
 - 金壹圓五拾錢也
 - 圖書部へ全上
 - 金壹圓也
 - 運動部へ全上
 - 金九拾錢也
 - 雜費
 - 金拾錢也
 - 基本金へ繰込み
 - 當分廢し
- 十二月 日役員會議を開き次の條々を協議せり
 - 一 來年一月に舉行すべき大會に關する件々
 - 一 高澤俊徳君を編輯部委員長に推すと
 - 一 各地支部の設立を許すに就きて本會規則を増補

すると
一新に支部設置規則を定むると
(此二項ハ大會ニ於テ承諾ヲ受クベキモノナリ
)……本會規則參照

三十六年一月六日 午前十時より忍高等小學校に於て冬期大會を舉行せり 例の如く幹事長の開會の辭各役員の諸報告ありて會議に移り豫て役員會よて定めらる支部設置規則并に本會規則増補の承認を得たり然して尙時間に餘裕ありければ幹事の改選を行ひ遠藤金次君稻垣方雄君を其後任と定めぬ。中食後、中居賛成員演壇に登られ懇々余等學生に注意あり、次いで村上多熊氏は學友よ就ててふ題目の下に滔々數千言の演説を試みられ會員諸子又交々快辨を奮ひて大に吾人の猛省を促せり乃ち茶菓を呼んで趣味津々たる裡に福引を行ひ噴飯絶倒笑聲鳴りも止まざりき
尙餘興として目崎得養吉田庸光兩君の薩摩琵琶金剛石來賓根岸徳三郎氏の國船河田長兵衛氏の川中島新年狂歌及臺灣人などありて思はき佳境に遊び充分の快を盡して午後五時と云ふに閉會を告げぬ
因に云ふ片山福三郎氏中居保三氏村賀貫一郎氏は金圓を寄附せられ會員大島喜代三郎君には蜜柑一箱を

寄贈せられたり茲に記して深く其厚意を謝す

二月八日 正午より役員會議を開き左の件を可決せり

- 一 來十一日に創立紀念會を開くと
 - 二 廣田初穂君を特別會員となすと
- 二月十一日 白駒の隙早くして我が忍學友會は早くも第七回の創立紀念會に邁ふ運とはなれり吾等會員はひでや此賀すべき吉辰に當り共に胸襟を寬ろげて本會の過去を顧み前途を語らんををと忍高等小學校内なる會場につめかけたりき、午後一時に垂たる比幹事長に依りて開會の辭は宣せられ直に談話は開始せられたり即ち題目は左の如し

- 一學友會の將來及希望
 - 小山與四郎君
- 二圖書部に就て
 - 伊藤彦次君
- 三本會に就ての所感
 - 牧野正賀君
- 四勤儉貯蓄に就て
 - 遠藤金次君
- 五運動に就て
 - 古市勉君
- 六學生の勞働
 - 稻垣方雄君
- 七風船の話
 - 田村榮三君
- 八雌雄陶法
 - 渡邊光生君
- 九偶感
 - 松原良男君
- 十お伽話數多

各自の口頃に抱持せる説を公にしたるとかれを聴者に感動を與へて頗る愉快なりき余興としては小山君の詩吟田村君の琵琶歌其他軍歌等ありたり
二月廿八日 熊谷中學校々友會文藝部にては講演會を擧げ文學博士芳賀矢一氏は當日日本人の織紉といふ一場の談話を試みられたりとなり
三月廿六日 熊谷中學校にては第四回卒業免狀授與式を舉行したり

三月廿七日 會員小山與四郎伊藤彦次高澤俊徳棚澤敏太郎特別會員廣田初穂の五君は滿五ヶ年の螢雪の苦空しからき爰に熊谷中學を卒業せられしを以て本會にては聊か祝意を表はして其勞を慰さんと三月廿七日午後二時半より忍高等小學校に於て祝賀會を擧げあり、先づ其狀況を記さんに開會に先ちて例の如く來會者一同撮影、終りて會場に着席合圖の鈴聲と共に遠藤幹事は立ちて開會の辭并に祝詞を述べ小山與四郎君は卒業生一同に代りて之が答詞をなし牧野正賀石島龜次郎狩野益三等の諸君は登壇せられて有益なる談話ありたり
於是茶菓を喫しつ、快談數刻興味津津々として湧き各自の面さては胸中に一つの悲みを見出すと能はざる程なりき、やがて夕陽は西山よ別れれば光を放ち入相告ぐる

暮鐘は沈々として歸るを促しければ割愛して卒業生諸子萬歳の聲諸共に散會せり
當日來會者は特別會員牧野正賀君會員今津寛之助君を初めとして都合三十三名なりき

附記小山與四郎君幹事長を辞せられたりしを以て當日改選の結果大澤久三君當選したり、又此日圖書部委員長伊藤彦次君の後任を遠藤金次君に囑托し幹事滿期改選の結果古市勉田村榮三兩君其後任となり四月十日 役員會を開き入會誘勸方法に就き協議を凝らし一先來四月十二日に入會せしむべき者を本會圖書部に集めて本會の來歴等を詳かに語るとせり
四月十二日 圖書部に於て入會勸誘を行ひたるに加藤殿菰野保 兩君は加入の旨早速承知せられたり
全月全日 全所に役員會を開き四月十九日午前第九時より忍公園に於て春季運動會を舉行するに決し且つ此運動會に關する費用運動種目に就いて種々商議する所ありたり

四月十九日 忍公園に於て春季大運動會を舉行せり此日や快晴にして一天拭えるが如くしかも微風は櫻花を涉りて大氣爲に薫り實に運動には好適なりし 午前九時準備に取掛り會員諸子の助を得て午前十時開會せ

全	二等吉田	庸光	古橋	龜	二牧野	眞一
市	飛	二小山與四郎			橋本	喜助
全	二等吉田	庸光			村上義之助	
數	取	一等遠藤	金次古市	勉橋本		喜助
全	二等吉田	庸光	伊藤龜之助	柴田		正
全	三等稻垣	方雄	古橋	龜	三輪	卓郎
徒歩	二周一等	稻垣	方雄	菰野	保	牧野 眞一
全	二等後藤	準	伊藤龜之助	柴田		正
全	三等古市	勉	古橋	龜	一村上義之助	
速	算	一等稻垣	方雄	三浦	忠軒	村上義之助
全	二等渡邊	光生	石島龜次郎	寺本		清
全	三等吉田	庸光	三輪	卓郎	吉田	英夫
二人三脚	一等	吉田	庸光		三輪	卓郎
全	二等	伊藤龜之助			橋本	喜助
封	皮	一等遠藤	金二古市	勉	佐藤	左惠吉

り 合圖の號令の許に徒歩一周より開始し會員諸君は熱心に快活に敏捷に運動せられ種目の進むに従ひて勇氣日頃に百倍し頗る愉快を感じたり○時半中食、是より先此活潑なる運動を見物せんとて近郷より集まる老若男女は引きも切らぬ殊に午後は種目面白きもの數多なれむつめかけ、忽ち柵外は山を築きて立錫の餘地なきに至りぬされど注意の到れる故にや終始會場の秩序は整然としてしかも一人の負傷者も出さざりしは爰に特筆大書するの値あるべきを信ぜ かくして活動滑稽愉快の聲裡に競技を終へたり時に午后四時 うれより賞品授與及び茶菓の饗應ありて大澤幹事長は閉會の挨拶をなし茲に目出度散會したり
今競技種目及び受賞者表を左に掲ぐ

競技種目	等級	大	中	小
徒歩一周	一等	稻垣方雄	根岸朝次	菰野 保
全	二等	吉田庸光	古市 勉	三輪卓郎
全	三等	後藤 準	大澤久三	橋本喜助
片	脚	一等	稻垣方雄	伊藤龜之助
				菰野 保

全	二等後藤	準	石島龜次郎	佐藤	左惠吉
盲目	玉拾	一等渡邊	光生	伊藤龜之助	牧野 眞一
全	二等吉田	庸光	古橋	龜	一柴田 正
全	三等稻垣	方雄	三輪	卓郎	橋本 喜助
二人三脚	一等	吉田	根岸		
全	三等三輪	吉田	英		
全	三等柴田	佐藤			
艦体	競争	一等後藤	伊藤		
全	二等古市	古橋			
猿廻	競争	一等渡邊	村上		
全	二等古橋	伊藤			
擬馬	競争	一等	加藤	後藤	
全	二等	村上	古市		

備考末ノ四種目ハ番外トシテ競技セシモノナリ

四月卅一日 役員會議を開き左の件を可決せり

一 來五月十日小會を舉行する事

一 右の會場經費に就いて

五月十日 忍高等小學校に於て小會を舉行せり 其次第は次の如し 大澤幹事長の開會辭、松原良男君の本會のベースボールに就いて、遠藤金次君の圖書部の事務報告及臨機應變、小山與四郎君の新入會員への希望及運動振起策、小宮義敬君の本會の智育体育に就て小山與四郎君の家康の政治、田村榮三君の英語發音及英語會話に就て、來賓加藤正三君の家康の功績及熊谷中學校友會運動部に就て來賓田村圭一君の滑稽談、根岸彌一君の落し話、古橋龜一君遠藤君加藤君の落し話尙餘興として小山與四郎君の詩吟ありて午後一時散會來會者氏名畧之

五月廿九日 特別を以て永沼啓一郎君を本會員に加入せり

六月十一日 役員會を開き

一 本會々計幹事に關する件

一 六月十四日午前八時より忍高等小學校に於て小會を舉行する事

を可決せり

六月十四日 午前八時より小會を舉行せり、大澤幹事長開會の辭を述べ遠藤勘一君は本會々員への希望及東京支部の模様等を趣味深久しるも簡單に語られ小山與四郎君は會員の親密を謀る方法として秩序を保つとが最も肝要なることを懇々と倦まず述べられ左の諸氏は各快辨を以て交々演壇に立たれたり

長沼啓一郎君 未來日本臣民の覺悟

根岸彌一君 滑稽談

遠藤勘一君 英語の簡便なる覺え方

大澤久三君 か伽話

右終て茶菓を喫し乍ら雜談數時に渡り閉會せしは午後一時なりき

六月二十日 熊谷中學校教諭穂積 積氏には鹿兒島縣師範學校へ轉任せられたり

七月十五日 贊成員渡邊世祐氏は大學院入學の爲先熊谷中學を辭任せられ東都に出發せられたり、生等は茲に先生が本會の爲めに深厚なる同情を賜はりしを感謝し併て先生の健康を祈るや切なり

七月廿九日 午後一時より役員會を開き夏季大會に關する件々を協議せり

八月四日 午前九時より忍高等小學校に於て夏季大會

一新趣興餘興一席

にしてこれやがて此日の景物なりき

八月廿七日 會員田村榮藏君には私立義會へ轉學せられたり

贊成員渡邊世祐氏はは出京の當時小石川白崎町に住居せられしが今回麻布區霞町廿三番地へ居を轉せられたり

◎忍學友會東京支部發會式

二月一日 神田區錦町松本亭開會

發會式と云ふて何も大袈裟に紹介する事はないので、又我支部は其目的とするところ互に交誼を温むるにありのだから徒に誇大に華かな會合は決して望まないものである

さて午后〇時半迄には各會員の足尖は悉く松本亭の方向をとつて居つものを見て時を置かず詰め掛けて會するもの総計十二名即ち

- 國分良吉君 橋本政男君 遠藤勘一君 小原政藏君 佐藤久一君 湯淺泉君 永島卯兵衛君 小山保孝君 森茂男君 森熊三君 高山信吉君 今津寛之助君

ヤ一しむらくとは誰もが室の入口に一步を進み入つ

を舉行しより 今其狀況の概容を述べんに劈頭大澤幹事長は立ちて之より開會する旨を述べられ幹事及各部委員長は所屬の各般報告を済ませたり 夫れより左記の會員諸子はデモスセニスの雄辨を以て己が提出せる論題を説破し吾人をして殊の外快哉を叫びしめぬ最後の野村君の臺灣生蕃界の事情は全君の實地遭遇せられ目睹せられし處とて一層興味深さを覺えさ

當日の演説談話の題目は

會員への希望

今津寛之助君

無線電話に就いて

小原政藏君

雜誌編輯につきて

遠藤勘一君

偶 感

高澤俊徳君

臺灣生蕃界の事情

野村二郎君

右終つて幹事乃改撰を行ひしに古橋龜一君幹事、松原良男君會計幹事に各其事務を執掌するとせばなれり中食後は東京より招き寄せたる講談師桃川小燕林の滑稽洒落なる講演ありて閉會せしは午後五時なりし會場に駐せられたる講談の解題は

一 義士傳中神崎與五郎之幼時

一 佐賀夜櫻

一 紀文冒險譚

た時に先づ口を突いて自然的に出た言葉であつた、着座炉を圍み茗を啜つて談笑盡きて皆和氣面に溢れて屋外は残んの雪の解けやらすに降りみ降らせみの鬱陶しい天候であるに引かへ此一室内には紫匂ふ雲から初霞爰霧としてはや春の訪れがあつた様な感じがしたそこで國分幹事は會員に規則の承認を得て此會合の一段落をつけ、時に三時、それから川田君の薩摩琵琶彈奏があつて造次各自佳境に遊び再び茶菓を命じて骨牌に快を取つた、例の蚤捕り眼は勝敗を争つて十二分の款を盡し午後の七時と云ふに楽しく閉會を告げた

◎支部の役員

幹事 湯淺 泉君 幹事 國分良吉君

忍學友會東京支部規則

- 第一條 本部ハ忍學友會東京支部ト稱ス
- 第二條 本部ハ在京忍學友會々員相互ノ交誼ヲ温メ兼テ本會トノ聯絡ヲ保ツヲ以テ目的トス
- 第三條 本部ノ目的ヲ達スル爲毎年壹月五月十月ニ通常會ヲ開キ又時宜ニヨリ臨時會ヲ開クコトアルベシ 本部會員ノ動靜ハ度々之ヲ本會ニ報告ス
- 第四條 本部ハ事務ヲ處理スルタメ幹事參名ヲ置キ庶

務會計及通信ヲ分掌ス而シテ幹事ハ會員中ヨリ互選スルモノトス

第五條 本會々員ニシテ在京セルモノハ本會規則ニヨリ總テ本部會員タルモノトス依テ在京會員ハ宿所氏名及所屬學校名或ハ職業ヲ詳記シ幹事ニ申出ツベシ

轉居改名退學及ビ轉校等ハ必ズ之ヲ幹事ニ届出ツベシ

第六條 會員ハ會費トシテ每年金參拾錢ヲ五十月ノ兩度ニ於テ分納スベシ其他通常臨時會等ノ會費ハ其都度之ヲ定ム

第七條 本則ハ通常會ニ於テ出席者三分ノ二以上ノ贊成ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ズ

◎東京支部員氏名

- 住 所 所屬學校又ハ職業 氏名(イロ)順
- 神田區袋町八番 私立鐵道學校 橋本 政男
- 地井田方
- 小石川區竹早町 國民英學會 小山 保孝
- 四七番地夏目方

◎忍學友會會計報告

自明治廿六年一月 至明治廿六年八月六日

收入之部

收入金合計貳拾六圓參拾錢六厘也

内譯

金四圓四拾錢六厘也

前期繰越金

金貳拾壹圓九拾錢也

會費三百拾九人分

支出之部

支出金合計貳拾參圓貳拾五錢也

内譯

金七圓也

圖書部へ補助

金七圓貳拾錢也

運動部全 上

金四圓五拾錢也

編輯部全 上

金四圓六拾壹錢也

諸雜費

差引殘高參圓五拾五錢六厘也

右之通ニ相違無之候也

運動部會計報告

自廿五年九月拾五日 至廿六年八月廿五日

收入ノ部

收入金合計拾參圓拾參錢五厘也

内譯

金壹圓拾參錢五厘也

前期繰越金

- 小石川區大塚窪町東京高等師範學校寄宿舎 狩野 益三
- 東京高等師範學校 高澤 俊徳
- 神田區三島町三丁目一番地 永島卯兵衛
- 大野みき方 村越 周三
- 芝區三田松坂町三八番地推崎トリ方 國分 良吉
- 慶應義塾大學 小河源政藏
- 本郷區中根岸八十番地山田有年方 佐藤 久一
- 下谷區根岸尋常高等小學校職員 湯淺 泉
- 本郷區元町二丁目四十七番地壹岐坂館方 目崎 得養
- 東京高等商業學校 重森 武三
- 芝區芝公園内東京郵便電信學校寄宿舎 廣田 初穂
- 東京郵便電信學校 森尾 津一
- 神田區南神保町九番地 森 茂男
- 牛込區西五軒町二番地田村方 熊 三
- 早稲田大學 本郷區龍岡町卅三番地長榮館
- 東京高等商業學校 本郷區春木町一丁目一番地 實業 廣田 初穂
- 日本橋區魚河岸いづ林方 慶應義塾 廣田 初穂
- 牛込區築土八幡町廿四番地保坂方 森尾 津一
- 本郷區龍岡町卅三番地長榮館 森 茂男
- 本郷區龍岡町卅三番地長榮館 森 茂男
- 本郷區駒込西片町吉番地 京北中學校 森 熊 三

金拾圓貳拾錢也 本會ヨリ補助
金壹圓八拾錢也 有志ノ寄付

支出ノ部
支出金合計金拾貳圓八拾九錢五厘也

内譯
金參圓也 ミット購入費
金四圓貳拾九錢也 野球用ボール代
金四拾五錢也 全バット代
金貳拾六錢五厘也 ミット其他運賃
金參圓五拾錢也 ベース購入費
金壹圓參拾貳錢也 庭球用ボール代
金七錢也 爲替料
差引殘金貳拾四錢也
右之通ニ御座候也

運動部寄附者報告

スロリアブック一冊計數器 會員 遠藤 勘一君
野球用ボール一個 同 遠藤 金二君
野球用ボール一個 同 遠藤 槐三君
野球用ボール二個 同 村上 後藤 齋藤 伊藤
根岸 柴田 古橋 三輪 吉田九君
庭球用ボール一個 同 村上義之助君

グローブ二個 高橋泰一郎君
バット一個 朝 芝 君

圖書部會計報告

收入總計金拾六圓五拾四錢四厘
内譯 金四圓四拾四錢四厘 前期繰越金
金拾圓四拾錢 本會補助金
金壹圓七拾錢 會員有志寄附
支出總計金拾參圓七拾錢參厘
内譯 金九圓八拾五錢 圖書購入費
金貳圓四拾錢 謝禮
金壹圓四拾五錢三厘 雜費
差引殘金貳圓八拾四錢壹厘
右之通リニ候也

縦覽者統計表

自明治卅六年一月一日起至明治卅六年七月卅一日

月	開部日數	會員縦覽者數	同上ノ日平均
一月	〇	〇	〇
二月	一五	七六	五、六六
三月	一七	三三	一、九四

月	四	五	六	七
九月	二八	七〇	四九	七八
三、一	五、〇〇	四、〇八	三、〇〇	

(備考) 二月と五月に來部者の多きは當時よ、で夜學會を催したからで七月は申すまでもなく暑中休暇を爲めです

貸與圖書冊數

自三拾六年一月一日起至三拾六年七月卅一日

月	一	二	三	四	五	六	七
冊數	三十八	五十八	二十八	四十九	五十一	八十四	八十四

寄贈圖書目錄

人物と最後外三十冊 會員 遠藤 勘一君
西國立志編外二十四冊 田島 龍三君

益軒十訓外十六冊 會員 高澤 俊徳君
懷舊外十六冊 特別會員 廣田 初穂君
正文章軌範釋義外七冊 會員 目崎 得養君
文藝評論外七冊 同 目崎 守義君
二千五百年史外五冊 同 富田 助三君
世界軍人談外四冊 同 小河原政藏君
徳川二名臣外四冊 同 古市 勉君
日本文學史要外三冊 贊成員 高木尙介先生
精神教育談外三冊 會員 橋本 政男君
游泳術外三冊 同 村上義之助君
中等書鑑三冊 贊成員 青木 一先生
文華三冊 會員 遠藤 金二君
中等教育東洋史外一冊 贊成員 佐藤要吉先生
クリスピー外一冊 岡田 正美君
クリスマスカロール外一冊 小林 昌資君
一橋會雜誌 會員 國分 良吉君
創作要訣 同 小宮 義敬君
商業簿記全書 半田信太郎君
日本小歴史 江間 金造君
日本文典 安岡徳次郎君
曉 星 第一號 崎崎文學社

總計壹百五拾四冊

圖書現在統計表 (明治庚午七月廿一日調査)

部門	部	部	冊	價	格
國語	五八	八四	二二、九五		
作文	四四	五一	九、三三		
倫理	一〇	一一	二、九七		
漢文	二〇	三九	一、二、六八		
地理	三一	三四	一四、七六		
歴史	一七八	二七二	五四、五七		
數學	五三	六五	二七、九二		
物理	二三	三三	一六、〇八		
博物	二二	二四	一〇、六二		
外國語	一〇一	一一二	二六、〇二		
辭書	九	一五	一六、三五		
雜書	一七四	一八二	三九、〇六		

小	説	三	四	七	九	八
雜誌	一	四	七	二	二	七
規則書	一	六	一	八
總計	九	二〇	一〇	二二	三八	四、〇二

(備考) 従來は借用書籍を編入してありましたが右は全く不都合な譯ですから今度全然之を省きました。爲めに價格の如きも十餘圓減少して居ります。併し實際はこの通りなのです。

編輯局より (會員の必讀を乞ふ)

◎本誌本號の投稿は比較に多かりし、會員諸子が熱誠を多とす。望むらくは今後常に此の如からんを。
 ◎編輯事務について遠藤勘一君を煩はすこと多く大澤久三高澤俊徳二君又少なからざる助力を與へられし。記して鳴謝す。
 ◎本號表紙題字は川島得太郎氏が厚意によりて得たるもの記して深く感謝す。
 ◎YK生の新詩は添削の勞少なからざる上本號は例號に比して新詩詩非常に賑はひしがため没書したり

君が何人も顧みざるの方面に指を染むる勇や可し。望むらくは洗練を試み來るよと三四なれ。今の如くんバ勞して遂に功なからん。

◎麻生が勿垂誕順境の一文は論旨一貫せしめて往々相拮する處あり。添削の餘地なきを以て没書せしむ。
 ◎伊藤氏の處世論は徒らに論旨の幽遠を衒ひたるが如く往々領解に苦ましむ。行文の奔放を多とせんも予輩屢々迷宮に彷徨するの感ありき。起てよ青年の一文加筆縦横乃ち執れり。予は同氏に苦言す、今少しく平易なれ、論旨を徹透せしめよ、術氣を去れ、而して後始めて君が文境見るべき也。ただ一氣呵成、生氣潑瀾たる處思ふに君が長處たゞせんバ非也。幸に論理學の一閱を希ふ。

◎佐藤氏の堀切の萬籟を見る、進取の氣象なかるべからせの二文の中後者を執れり、而も妄りに削潤を加へず。聊か編者の眞意の存するありと雖も今姑らく言はじ。幸に今後の奮勉を祈る。

◎吉田氏の大雅堂の熱心と題する一文はあまりに某々の文に似たり。敢て思まほしき剽竊と言はざるも全文君が獨創なりといふを得ざるべし。今没書とす。幸ひに新らしき方面にその手腕を揮ひ來るを忘るゝ勿れ。

◎田村氏の英文は狩野益三君の添削を得たり。狩野君今病あり。而してなほおの事ある予輩深く感鳴に堪えざる處なり。
 ◎來號は十號紀念として聊々紙面の上に刷新を加へんとす。幸ひに諸子が助力によりて圓滿に吾等が計畫を實現せしむ。

◎本號に發表したる會歌募集は必ら成功せしめざるべからじ。諸子が奮勵を希ふや切也。(石島薇山記)

投稿畧規

編輯上の便宜のため今回投稿畧規を設く嚴守を乞ふ
 ◎用紙 半紙野紙のづれにて
 ◎字詰 壹行廿四字詰を限り字跡は楷書たるべし
 ◎種類 出版條例に抵觸せざる範圍内に於て何にても可なり
 ◎句讀 必らず自ら附せられたし句點は無用
 ◎添削 甚だしきもの、外猥りに加筆せざれど原稿は必ら本行の間に餘白を存せられたし
 ◎原稿 には必ら實名を記入されし誌上乃匿名は御隨意なれど
 ◎假名 は必ら平假名を用ゐられたし誌面の跡裁上片假名は

Presaicなり ○原稿 は石島都太郎宛送附を乞ふ在
校會員は便宜上編輯部委員へ渡さるゝも妨げなし
○以上の規程は嚴守されたしさらば編輯者泣か
せ文選掛校正掛泣かせの罪輕からじ慎み玉はざらめ
や

廣 告

◎在外會員及び特別會員諸君に告ぐ

本會雜誌第九號實費一部金拾 錢に付着本勿々本部へ
宛送金相成度候但し遠隔の地に在る士は郵券代用(成
るべく貳錢切手)にても苦しめらば候別に督促狀差出
さず候に付御失念な久送金あり度切望致候

◎投稿募集!!!

本誌第十號は明年七月を以て必らず發刊すべく候よつ
て四月卅日迄には投稿相成度本誌は本會創立第八週年
に相當致候間聊の内容の上に改善の實を擧げ度計畫幸
ひに諸君が熱誠なる贊助によりて圓滿なる效果を擧ぐ
るを得心獨り記者の喜ばみならずと存候滔々たる蟬蛸
的團練の間に介立して不屈不撓よく今日の地盤を築き
たる一事は吾等の最も proud すべし事實と存候吾人

は之を機として他日大飛躍を試むるの立脚地を固むべ
し聊か健闘縦横なりし當時を回想し併せて將來新らし
き方面に勇進する首途を祝ぎ度候偏へに同情に富める
諸君が助力を祈り候
(注意)編輯上に關する書信、投稿等は凡て忍町行田
石島都太郎宛發送あり度候也

忍町行田石島都太郎方

廿六年十二月 忍學友會編輯部

延 刊 謝 告

本誌は九月發行の豫定にて原稿は八月上旬印刷所へ交
附致候處印刷所に無事事情あり久しく印刷に着手し得
ざりし爲め大に延刊致候段深久謝する處に候但し今津
君が特別なる努力あらざりせば或は今日なほ未だ刊行
し得ざりしやも保し難のりしほきにて延滞責はとも角
此点は吾等の感謝に堪えざる處に候

廿六年十二月 忍學友會編輯部

會 告

新 入 會 員

萩野 保君
萩野 喜造君
加藤 巖君
田島 太郎君
牧野 眞一君

良三改 山田清兵衛君

現 在 役 員

幹 事 長	大澤 久三
幹 事	古橋 龜一
會 計 幹 事	松原 良男
運動部委員長	吉田 庸光
圖書部委員長	遠藤 金二
編輯部委員長	遠藤 勘一

明治三十六年十二月七日印刷
明治三十六年十二月十日發行

非 賣 品

埼玉縣北埼玉郡忍町大字行田參拾七番地
編輯兼發行人 清野 米造
埼玉縣北埼玉郡忍町大字行田百九拾貳番地
印刷 人 今津 德之助
印刷 所 今津 活版所
埼玉縣北埼玉郡忍町

發行所 忍學友會



埼玉県立図書館



3 1068628